青森市の埋蔵文化財

田茂木野遺跡発掘調査報告書

１９８６

青森市教育委員会

序　　文

青森市では昭和60年度、国県の補助を受け、田茂木野遺跡の緊急発掘調査を実施いたしました。

遺跡はそっと眠らせておくのが一番よい保存方法だなどといわれておりますが、貴重な資料の散逸を防ぐため、今回、調査が行われました。

出土品には石器、土器、土製品がみられ、縄文前期をはじめ、中期、後期、晩期の遺物が各層から出土いたしております。

此の度、関係者各位のご努力により調査報告が作成され、まことに有難く、深湛なる敬意を表するものであります。

本書が学術、文化の発展と郷土青森の再確認にも寄与し、発掘調査の重要性をご認識いただける資料ともなれば、望外の喜びであります。

昭和61年3月

青森市教育委員会

教育長　安　部　健　五

例　　言

1. 本報告書は、昭和60年度に実施した青森県青森市に所在する田茂木野遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、青森市教育委員会が主体者となって昭和60年7月12日から9月11日までの期間で実施したものである。
3. 本報告書の執筆は、塩谷隆正、山岸英夫が協議の上、文末に示す分担に従って行った。
4. 本報告書に収録した図版の縮尺は、それぞれの大きさによって数字及び単位を記載した。ただし写真図版にかんしては、縮尺不同である。
5. 出土遺物は、すべて青森市教育委員会が保管し、地域社会の学術、文化の資料として活用するものである。
6. 地主である工藤義男氏にはかずかずの御好意、御協力を賜わった。報告書を刊行するにあたって、あらためて感謝を表します。

目　　次

Ⅰ　調査と概要
1. 遺跡の位置……1
2. 調査要項……1
3. 遺跡の概要……2
4. 周辺の遺跡……4
Ⅱ　発掘調査
1. 調査方法……5
2. 調査の経過……5
3. 基本層序……7
Ⅲ　検出遺構
1. 住居跡……8
2. 炉跡……12
3. 土壙……12
Ⅳ　出土遺物
1. 縄文時代前期の土器……13
2. 縄文時代中期の土器……15
3. 縄文時代後期前半の土器……17
4. 絶文時代後期後半の土器……25
5. 縄文時代晩期の土器……27
6. 土製品……27
7. 石器、石製品……29
Ⅴ　まとめ

第１図　遺跡の位置

Ⅰ　調査と概要

1. 遺跡の位置

1　はじめに

青森市は北緯40°49′、東径140°45′にあり、本州の最北の人口約30万の都市で面積は693．43貴k㎡である。

市の南部から東部にかけて八甲田山系、西部を梵珠山系に囲まれており、地形上山地が多く、総面積の83%は森林が占め、耕地は9%弱に過ぎず、耕地の8割は水田であって、全国はもとより、青森県平均と比較しても非常に高い。

気象条件は、日本海気象と大平洋気象と双方の影響を受けるため冬季には寒冷多雪で、夏季には偏東風（やませ）があり、冷害が生じやすい。

2　遺跡の位置（第1図）

北八甲田連峰に水源を有し、北の青森湾に向って流れる駒込川と構内川によって浸蝕されれた台地上に位置する。駒込川の東には梨の木平、構内川の左側の西には雲谷平があり、その中間に位置し、八甲田山の前岳（1251．7m）北麓の大滝平の北端部に当り、標高130mを測る洪積世台地上に位置する。

青森湾の海岸線より約9km南に、市街地より南東部の郊外、現在、青森市役所構内支所管内にあり、田茂木野集落より南の山間部には、開拓村の鋼坂（戸数10）があるだけである。

しかし、十和田八幡平国立公園の十和田北線の沿線ぞいにあるため、近年になって、観光リンゴ園、サイクリングセンター、自然林養村等が整備され、リンゴと観光で賑いをみせている。

2. 調査要項

1）調査目的

開発により遺跡が破壊される事前に発掘調査をし、記録保存を図るとともに地域社会の埋蔵文化財の活用に資する。

2）遺跡の名称及び所在地

田茂木野遺跡

青森市大字田茂木野字阿部野7番地

3）調査面積

300㎡

4）調査期間

昭和60年7月12日～同年9月11日

5）調査主体者

青森市教育委員会

6）調査員

青森市教育委貞会社会教育課文化係長　塩　谷　隆　正

北奥古代文化研究会々員　山　岸　英　夫

3. 遺跡の概要

本遺跡名は「全国遺跡地図・青森県」に青森20青森東部番号21で、01160田茂木野遺跡となっていることによった。埋蔵文化財包蔵地調査カードには、縄文時代晩期となっており、調査年月日は、昭和54年8月23日、調査者は市川金丸、塩谷隆正、春日伸興他で、所在地は、青森市田茂木野字阿部野となっている。

田茂木野に土器・石器が出土すると話してくれたのは、昭和45年、筒井橋のたもとで理髪店を営んでいた豊島氏である。氏は石に興味を持っていて荒川や駒込川上流を探策し、庭石や盆栽用に水石として蒐集していた。たまたま、青森市民文化センターの郷土資料室に展示された「青森市周辺の土器・石器展」をみて、自分が蒐集している中にも石器類があるので、鑑定してくれとのことになって、氏の家を訪問するようになった。氏は青森市内ばかりでなく、岩木山麓の縄文時代の石器類も所有しており、後に市内出土のものは市に、県内のものは、当時県立郷土館開設準備室で資料を蒐集した際に寄贈をした。氏は自称、隠居の身で、よく私を蒐集した場所につれていってくれた。

氏と田茂木野の川村繁光氏を訪れ、リンゴ園造成時に息子さんが集めた土器をみせてもらい大洞A式の壺や浅鉢の完形品の写真を撮影させて貰った。それが田茂木野の第一地点で、豊島氏はさらに杉林の中にも、土石器が出土する地点があると案内してくれた地点は、盗掘の痕跡があり、やはり大洞A式の破片が散らばっていた。そしてそこを第二地点とした。従って田茂木野遺跡は縄文時代晩期大洞A式の単純遺跡として登載されることになった。また、昭和46年に、杉林から出土した土器2個が市に地主から寄贈を受けているので、今回実測し、参考例（第2図）として解説しておいた。

また文献に現われた田茂木野については、「角川日本地名辞典2、青森県」1985によれば、「田

茂木野は、八甲田山の北西麓に位置し、北流する駒込川と西側の構内川とに狭まれた高原上ある。地名は地内のタモの古木に由来するという。（横内村誌）江戸期、津軽郡田舎庄のうち。弘前藩領、当村は万治元年雲谷村の枝村として開発され、貞享元年には家数８軒であったという。（構内村誌）なお、山間地で高請されるような田畑もなく、江戸期の郷帳類には村名、村高が見えない。江戸期には雲谷村の一部として把握されたものと思われる。村高は、明治４年の「旧高旧領」にはじめて27石余と見える。また、明治２年の「諸組村寄帳」（弘前図書館印土資料目録７）によれば、浦町組のうちに田茂木野村がみえ、枝村であることを示す印がつけられている。これらにより、当村は公式には明治になって雲谷村から分立し、一村になったと思われる。」とある。

参考例（第２図）

1、は胴部中央に最大径を有し、それより上部肩位まで兀字状の流麓な工字文を向い合わせて描出している。

頸は逆ハ字形に外反し、直線的に立ち上がっている。胎土、焼成ともに良好堅緻である。器表面は黒味を帯び研磨されている。

2、は山形の波状口録を呈し、その裾部に二個一対の小突起を有する。頸は緩やかに外反し、口縁部内外に一本の沈線をめぐらし、胴部中央に鋭角を描くほどの最大径を持つ。文様の描出は１と同様であるが兀字状に入組んだ工字状文を施文している。１条の沈線によって胴部と底部を区分している。胎土は堅緻で焼成も良好である。器表面は黒味がかった光沢があり、丁寧に研磨されている。

第２図　遺跡周辺出土の土器

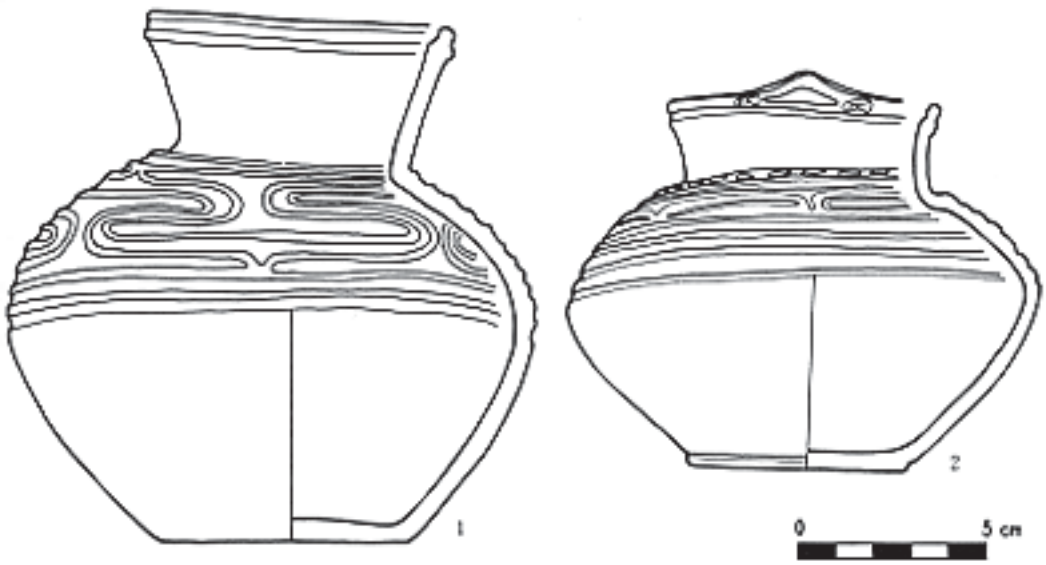


表１　周辺の遺跡一覧表（第１図）

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	備考
1	戸山	戸山字赤坂	散布地	縄文（前・中）	
2	赤坂	戸山字赤坂	〃	縄文（中）古代	
3	駒込館	駒込字月見野	城館		
4	月見野	駒込字蛍沢	散布地	縄文（後）古代	
5	沢山（1）	沢山字平野	〃	縄文（晩）	「沢山Ⅰ号遺跡調査速報」考古学ジャナル32号
6	沢山（２）	駒込字月見野	〃	古代	「沢山Ⅱ号逢跡調査報告」燃紀文2号
7	沢山（３）	沢山字平野	〃	古代	
8	月見野霊園	駒込字月見野	〃	古代	
9	玉清水Ⅳ	〃	〃	縄文（晩）	
10	玉清水Ⅰ	〃	〃	縄文（晩）	
11	玉清水Ⅱ	〃	〃	縄文（後）	
12	玉清水Ⅲ	〃	集落跡	縄文（前）	昭和45．市教委発掘調査
13	阿部野	幸畑字阿部野	〃	縄文（早・後）古代	昭和49．市教委発掘調査
14	梨の木平	駒込字深沢	散布地	縄文（晩）	
15	梨の木平牧場	〃	〃	縄文（中）	
16	四ッ石	四ッ石字里見	〃	縄文（後）	昭和37．38．市教委発掘調査
17	野尻館	野尻字野田	城館	中世	「青森県の中世城館」昭和58
18	横内城	構内字亀井	〃	〃	〃　〃
19	横内遺跡(A)(B)	合子沢字山崎	散布地	縄文（前）	
20	新町野	新町野字菅谷	〃	縄文（中）	

（塩谷　隆正）

Ⅱ発掘調査

1. 調査方法（第３回）

調査区は、かつての小沢と思われる窪地を狭んだ２地区であるため、南側地区をＡ区、北側地区をＢ区と仮称し、一区画4M×4Mのグリットを配置した。各グリットの名称は、北から南に向かって１．２．…としたが、Ａ区においてのみ、遺構が調査区の南北に延びる場合拡張が可能なため、グリットの名称をＡ－２区から付した。

層序は、各グリットの東壁、南壁を記録することとし、層序番号にはローマ数字を、間層にはアルファベットを用い、色調、成分、包含遺物等を記録することとした。また、遺構内の覆土については算用数字を用いた。

遺構番号は、発見順に付し、平面実測には簡易遣り方測量を用い、縮尺は$^{1}/_{10}$を原則とした。遺物については、遺構ごとに独立した番号を付し、簡易遣り方測量、レベリング、写真撮影後出土順に番号を付し、１点ごとに遺物カードと台帳に記載し、層位ごとに取り上げた。

遺構外の遺物は、一括土器、石器等の主要遺物については、遺構に準じて取り上げ、その他の遺物に関しては、基本層序に基づき各グリットごとに取り上げた。

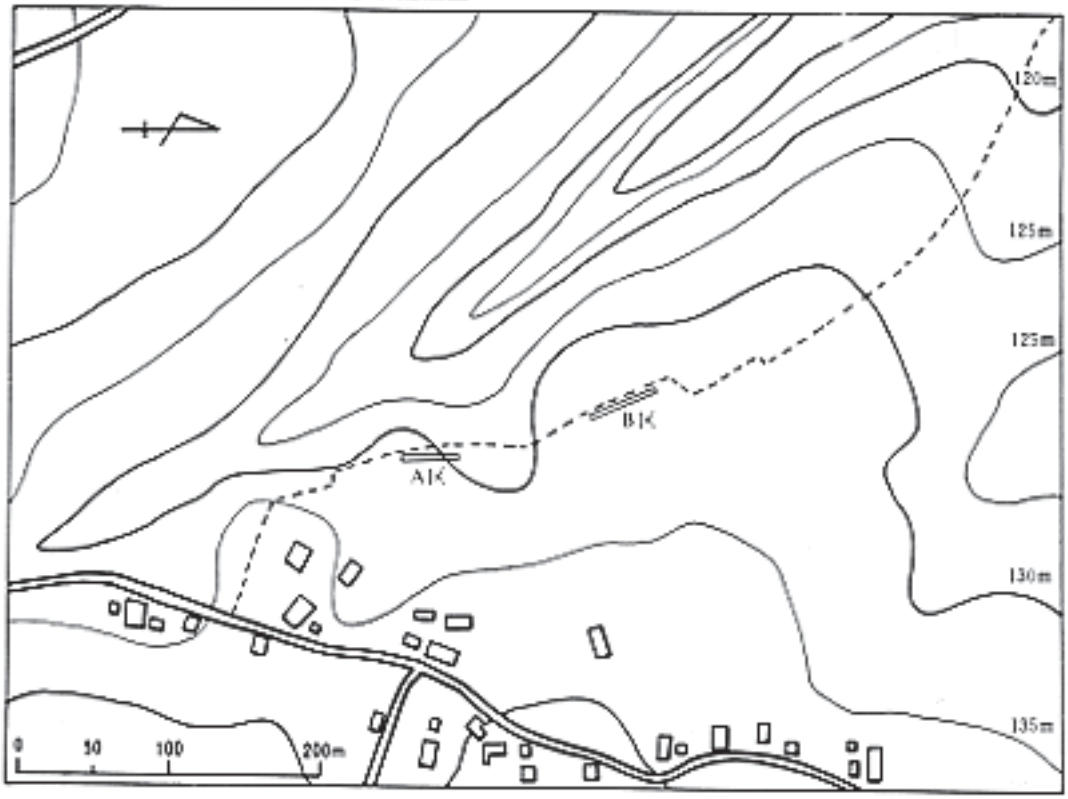
2. 調査の経過

発掘調査は、器材、消耗品等の準備を行ったのち、７月12日からＡ区より粗掘り作業を開始した。粗掘り作業の進行に伴い、平坦面に位置するＡ－６～９区にかけては、リンゴ園に造成のさい削平されたものらしく、表土下は地山と思われる第Ⅵ層にまで達しており、遺物はまったく出土しなかった。Ａ－２～５区においても、抜根による撹乱がかなり認められ、遺物の出土量は少なく、いずれも流入状態で散在する程度で、遺構はまったく確認できなかった。各グリットごとに層序を記録し、写真撮影後、埋めもどしを行いＡ区の調査を終了した。

８月７日よりＢ区の調査を開始した。Ｂ区も以前、畑地であったため攪乱が激しく、縄文時代後期前半の土器を中心とした各時期の遺物が、全域から混在状態で出土した。遺物の検出、精査の結果、第Ⅴ層上面において、炉跡及び住居跡が確認された。第２号住居跡及び土壙は調査区外へ延びているため全体の$^{1}/_{2}$ほどの検出にとどまった。遺構は、精査後、平面測量、写真撮影等の記録を行い、それと並行して各グリットの層序を記録し、調査終了したグリットから順次埋めもどしを行った。

９月11日、Ｂ区の埋めもどしを完了し、全調査を終了した。

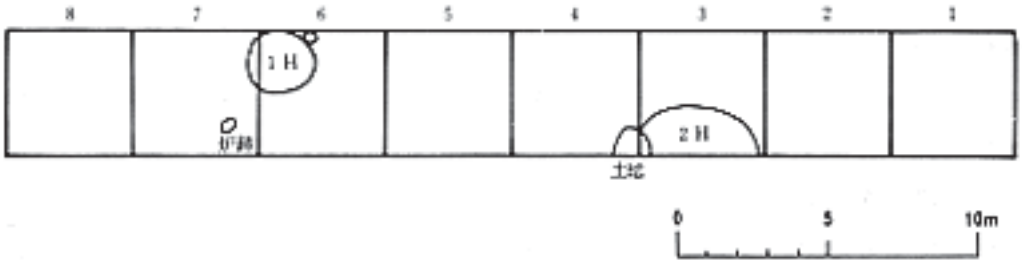
第３図　周辺の地形図・グリット配置図



（青森市第内図より転写）

A区　グリット配置図

B区　グリット配置図及び遺構配置図



3．基本層序（第４図）

各グリットの中で攪乱が少なく、最も明瞭な堆積を示していたＡ－３区、東壁を基本層序として観察した。

第Ⅰ層　黒褐色土層。旧耕作土、草木根を多量に含む。

第Ⅱ層　黒色土層。炭化物混入、遺物包含層。

第Ⅲ層　暗赤褐色土層。ローム粒子混入、無遺物層。

第Ⅳ層　暗褐色土層。炭化物混入、遺物包含層。

第Ⅴ層　褐色土層。炭化物、黄褐色土混入、遺物包含層。

第Ⅵ層　黄褐色土層。無遺物層で、地山と思われる。

Ａ区の平坦面は、前述したように削平され、表土下は地山と思われる第Ⅵ層にまで達していたが、緩斜面では地山にほぼ並行した堆積を示していた。Ｂ区では、第Ⅰ層～第Ⅲ層が攪乱によって混在しており、層界は不明瞭である。

各包含層ごとの遺物出土状況から、以下のように層位的に遺物が大別できた。

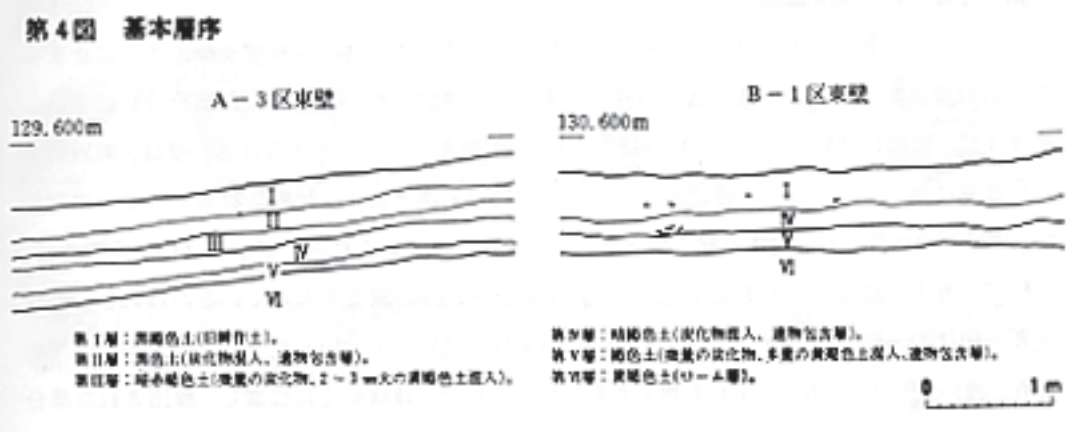
第Ⅱ層　縄文時代後期後半の遺物を主体として、縄文時代晩期の遺物もわずかであるが混在状態で出土している。

第Ⅳ層　本調査区の主要遺物である縄文時代後期前半の遺物が、第Ⅴ層上面を生活面として多量に出土している。

第Ⅴ層　縄文時代前期の遺物及び、縄文時代中期の遺物が混在状態で出土している。

遺構は、第Ⅴ層中で確認した第２号住居跡を除き、いずれも第Ⅴ層上面において確認され、その底面は第Ⅵ層にまで達している。

（山岸　英夫）



III　検出遺構

1．住居跡（第５図、第６図）

第１号住居跡（第５図）

Ｂ－６、７区に位置し、第Ⅳ層上面において、暗褐色土の落ち込みとして確認した。計測値は、長径２．５M、短径２．３M で、平面形は不整円形を呈する。完掘状態では、テラス状の段を有する構造となっているが、遺構内の精査の結果、第４層上面にも生活面が存在することが確認された。第４層上面を床面とするもので、同一平面上で柱穴と考えられる小ピットも確認されている。床は、移植ゴテを阻むほどに堅く締まっており、西側がやや高いものの平坦に作られ、確認面からの壁高は、東側が 40cm、西側が 30cm 前後で、ゆるやかに立ち上がっている。小ピットは、北西及び西南の壁際に各１個づつ認められ、直径、深さともに 20cm 前後である。

第４層下は、テラス状の段から 20cm ほど垂直に、長径１．７M、短径１．２M の大きさに、ほぼ楕円形に掘り込まれており、底面では、ピット等の付属施設を確認することができなかった。

出土遺物（第５図１～23）

遺物は土器片のみであるが、覆土ごとの所属時期が、以下のように比較的明確である。

第２層（１～４、13～16）：いずれも縄文時代晩期に所属するもので、朱塗りの台部（3）や、内面に漆と思われる乾燥物が付着する壺形土器片（4）が認められる。

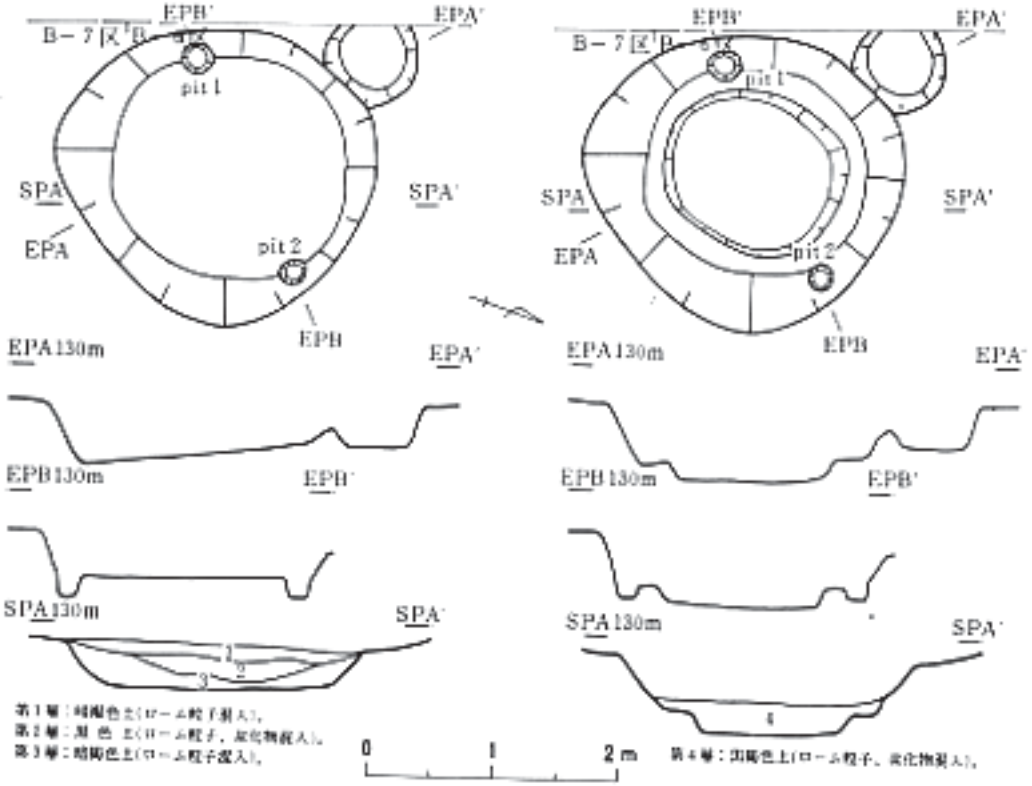
第３層（５～12）：いずれも縄文時代後期前半に所属するもので、６は、二次火熱を受け赤褐色に変色し、８は、近接する炉跡周辺から出土した鉢形土器と同一個体である。

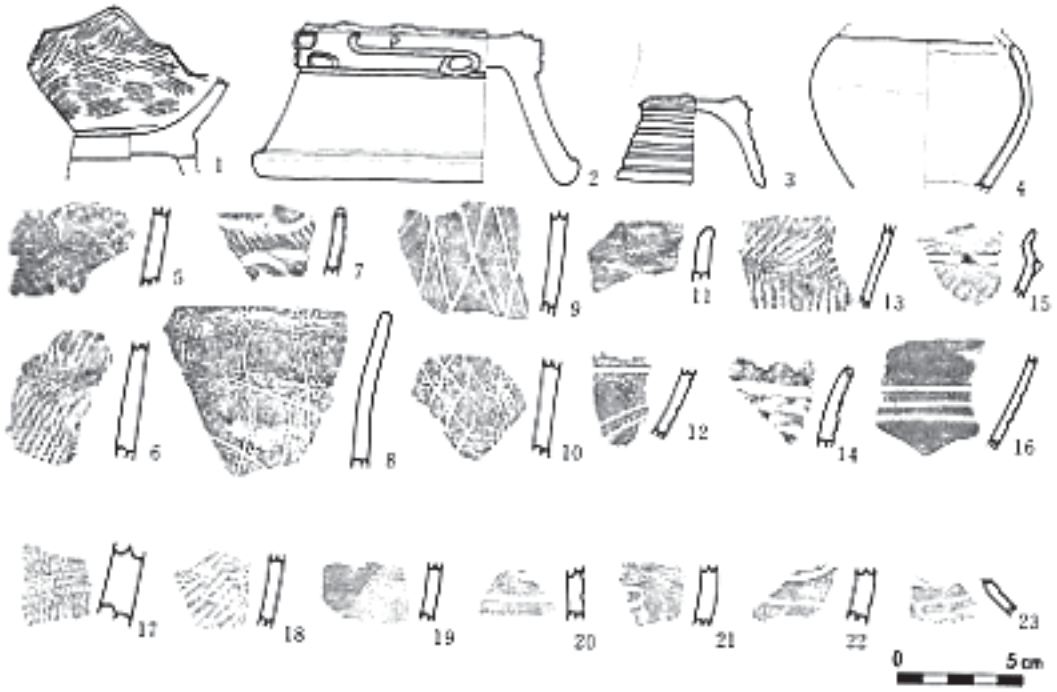
第４層（17～23）：いずれも細片であるが、17 を除き縄文時代後期前半に所属するものである。17 は、縄文時代前期、中期のいずれかに所属するものと考えられる。

第２号住居跡（第６図）

Ｂ－３区に位置し、東側は調査対象区外に延びているため全体の $^{1}/_{2}$ 程度を検出するに止まった。第Ⅵ層上面において、第Ⅴ層土の落ち込みとして確認され、検出された部分の計測値は、長径 4M、短径１．９M で、平面形は、円形ないし楕円形を呈すると考えられる。壁は、第Ⅵ層をほぼ垂直に掘り込んでおり、確認面からの高さは 15cm 前後と低く、比較的軟弱であるのに対して、床は平坦に作られ、全体が堅く締まっている。柱穴と考えられる小ピットは 10 個確認され、主柱穴と考えられるピット１～５が、いずれも 50cm ～ 70cm の深さをもっているのに対し、ビット６～10 は 20cm 前後と浅いものとなっている。また、ピット 1、10 と 5、6 に切り合いが認められ、浅いピット 10、6 はいずれも埋められていた。炉は、ほぼ中心に位置し、検出された部分

第5図　第1号住居跡


EPB'
EPA'
B－7区'B
pit 1
SPA
SPA'
EPA
pit 2
EPB
EPA 130m
EPB 130m
SPA 130m
0
1
2 m


0
5 cm

の計測値は、長辺60㎝、短辺78㎝で長方形を呈するものと考えられる。床面をほぼ長方形に10㎝ほど掘り込み、底面の壁際に15㎝大の川原石を不規則に埋設しているもので、焼土は北側底面に散布状態でわずかに確認された。遺物は、炉の北側、床面上から胴部下半を欠損する鉢形土器と石匙が出土したのみで、その他の遺物はまったく認められなかった。

出土遺物（第6図1、2）

1は、胴部下半を欠損する鉢形土器である。胴部から口縁部にかけて直線的に外反する器形をとり、口縁部の形状は平縁を呈し、器厚は5㎜前後と薄い作りとなっている。文様は、LRの特殊な縄文〔R（1、1）＋R（1、1、1)〕を施文した上に、沈線文を主要文様として施文しているもので、一条の沈線によって、口縁部と胴部を区画し、大柄な「巳」の字状の沈線文を5面に配し、文様間の上下に円形文を施文しているものである。また、口縁部の沈線上には2個一対の補修孔が2ヶ所に認められる。

2は、一部に原石面を残す厚身のある剥片を素材とする石匙で、つまみ及びその周辺に厚身を取るための剥離調整が施されているものの、つまみは太く概して雑な作りとなっている。右側及び下端には、比較的入念な剥離調整が施されており、鋭い刃部を作出している。

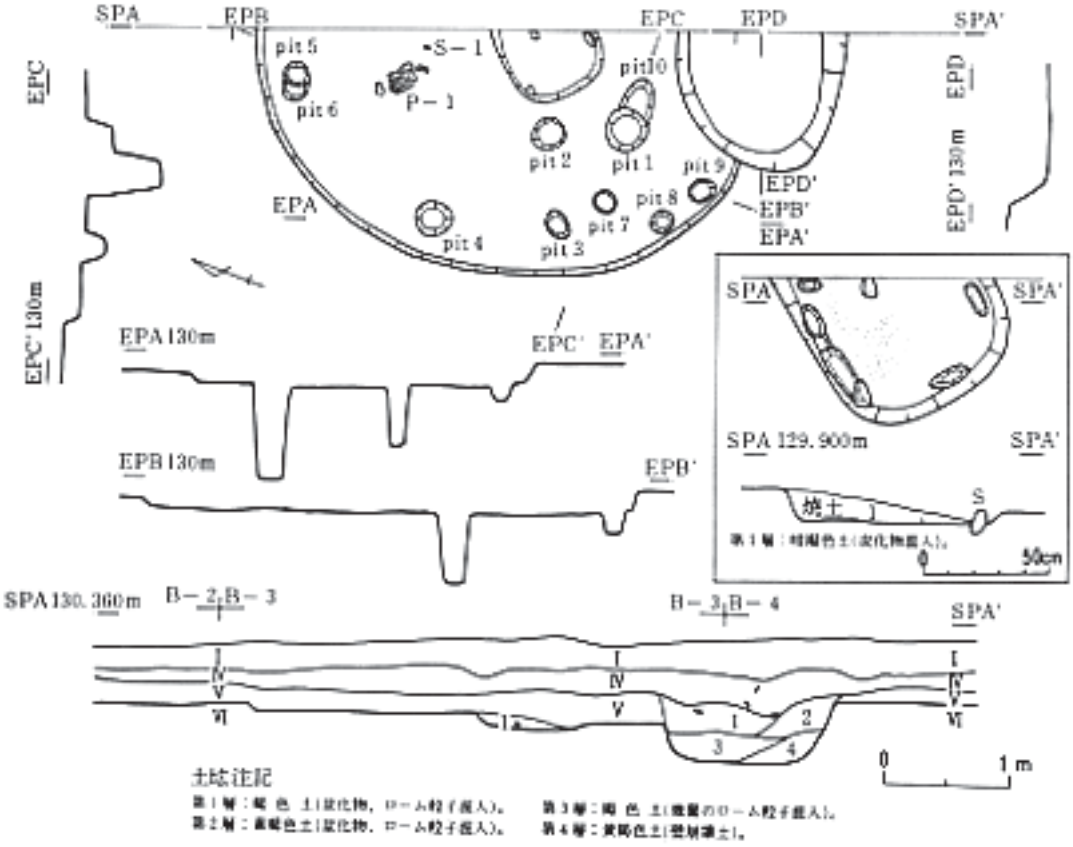
住居跡小括

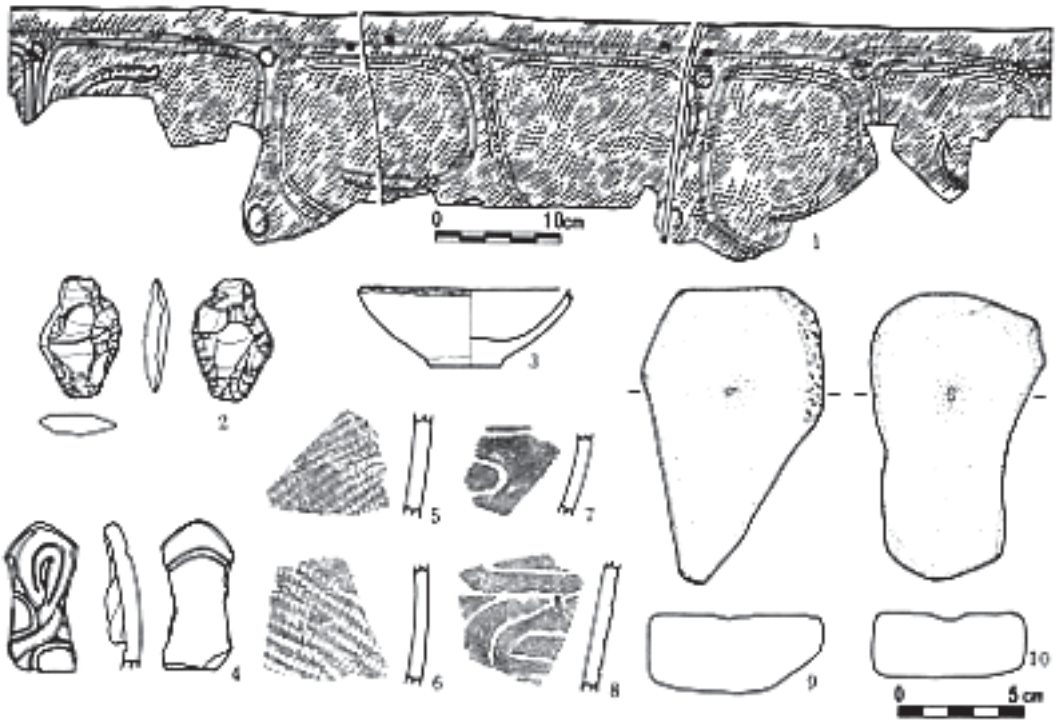
第1号住居跡であるが、構築時から完掘状態の構造を持っていたものなのか、他の遺構との切り合いや改築によるものなのかは不明である。覆土第4層の状態から考えると、前者では構築直後に埋め戻され、後者では改築以前の遺構内に堆積土が存在しないという状態でなければ不可能である。ただ明瞭なことは、覆土第4層を埋め戻し、その上面を生活面としていた時期が、出土遺物から縄文時代後期前半と考えられることである。したがって第1号住居跡の構築時期は、縄文時代後期前半ないしは、それ以前と考えられよう。

第2号住居跡の構築時期であるが、まず第Ⅴ層から掘り込まれていることから縄文時代後期以前と考えられる。時期判定の明確な資料となる床面出土の遺物は、胴部下半を欠損する鉢形土器一点のみであるが、器形や「巳」の字状の沈線文を特徴とする点は、逆「L」の字や逆「し」の字を主要文様とする、所謂大木10式土器に並行する、山田野B式や唐竹式土器に近似するものである。したがって、第2号住居跡の構築時期は、ほぼ土器の年代と同定しうる縄文時代中期最終末期と考えられる。　（山岸　英夫）

青森県教育委員会1978「青森市三内遺跡」
青森県教育委員会1978「三内沢郡遺跡」
田村誠一1968「大曲1号遺跡」岩木山刊行会
葛西・高橋1978「井沢遺跡」平賀町教育委員会

第6図　第2号住居跡、土坑





2. 炉跡（第７図、第12図16、17）

Ｂ－７区に位置し、第Ｖ層上面において焼土と礫が出土し精査の結果、炉跡と確認した。長軸52cm、短軸44cmで、平面形は楕円形を呈し、第Ｖ層及び第Ⅵ層を10cmほどの深さに鍋底状に掘り込んでいる。縁辺部の西南側に、長辺27cm大の礫を一個のみ埋め込んでおり、炉のほぼ中央に7cmほどの厚さで焼土の堆積が認められた。

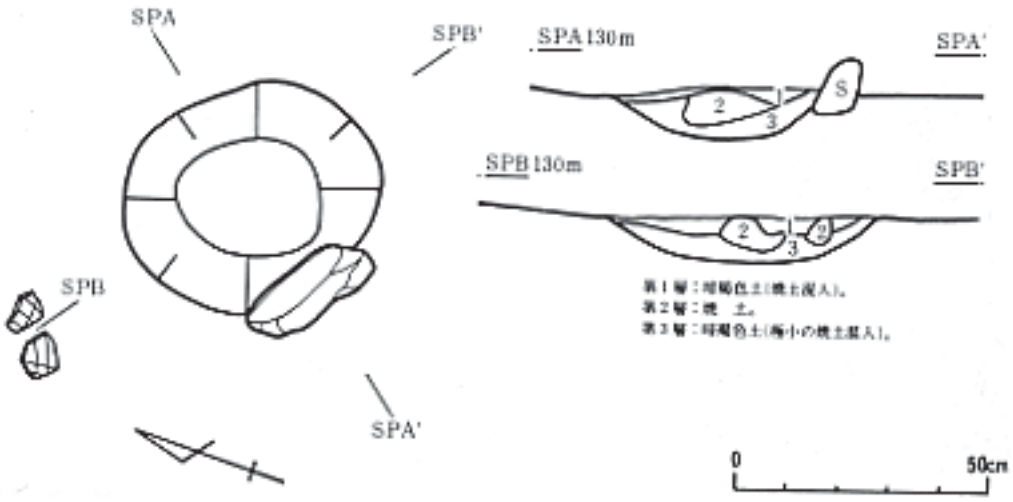
さて炉跡の構築時期であるが、内部からは遺物が出土しなかったものの、確認面が第Ｖ層上面であることと、周辺に縄文時代後期前半の土器（第12図16、17）が平面的に散乱していることから、縄文時代後期前半に構築されたものと考えられる。また、周辺に柱穴等の付属施設が認められなかったことから屋外炉と考えられる。

3. 土壙（第６図）

Ｂ－3、4区にまたがって位置し、第２号住居跡の南側を切って構築されており、東側は調査対象区外に延びているため全貌は不明である。検出された部分の計測値は、長軸110cm、短軸134cm、探さ50cm、断面形は深い鍋底状を呈し、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。覆土中より、縄文時代後期前半の土器及びくぼみ石（第６図３～10）が出土している。

構築時期は、第Ｖ層上面から掘り込まれていること、内部から出土している土器がいずれも縄文時代後期前半に所属するものであることから、ほぼ土器の年代と同定しうるものと考えられる。ただし、その用途については資料に欠けるため不明である。　　（　山岸　英夫　）

第７図　炉　跡



Ⅳ　出土遺物

本調査で検出された遺物は、縄文時代前期から晩期の長期間にわたっているため、ここでは各時期ごとに特徴を述べて行く。

1. 縄文時代前期の土器（第８図）

第Ⅴ層中より散乱状態で出土したもので、出土量は非常に少ない。唯一の復原品も全体の$^{2}/_{3}$ほどを欠損しており、全体的特徴が不明確であるために、ここでは一括して器形、文様の観点から概要を述べて行く。

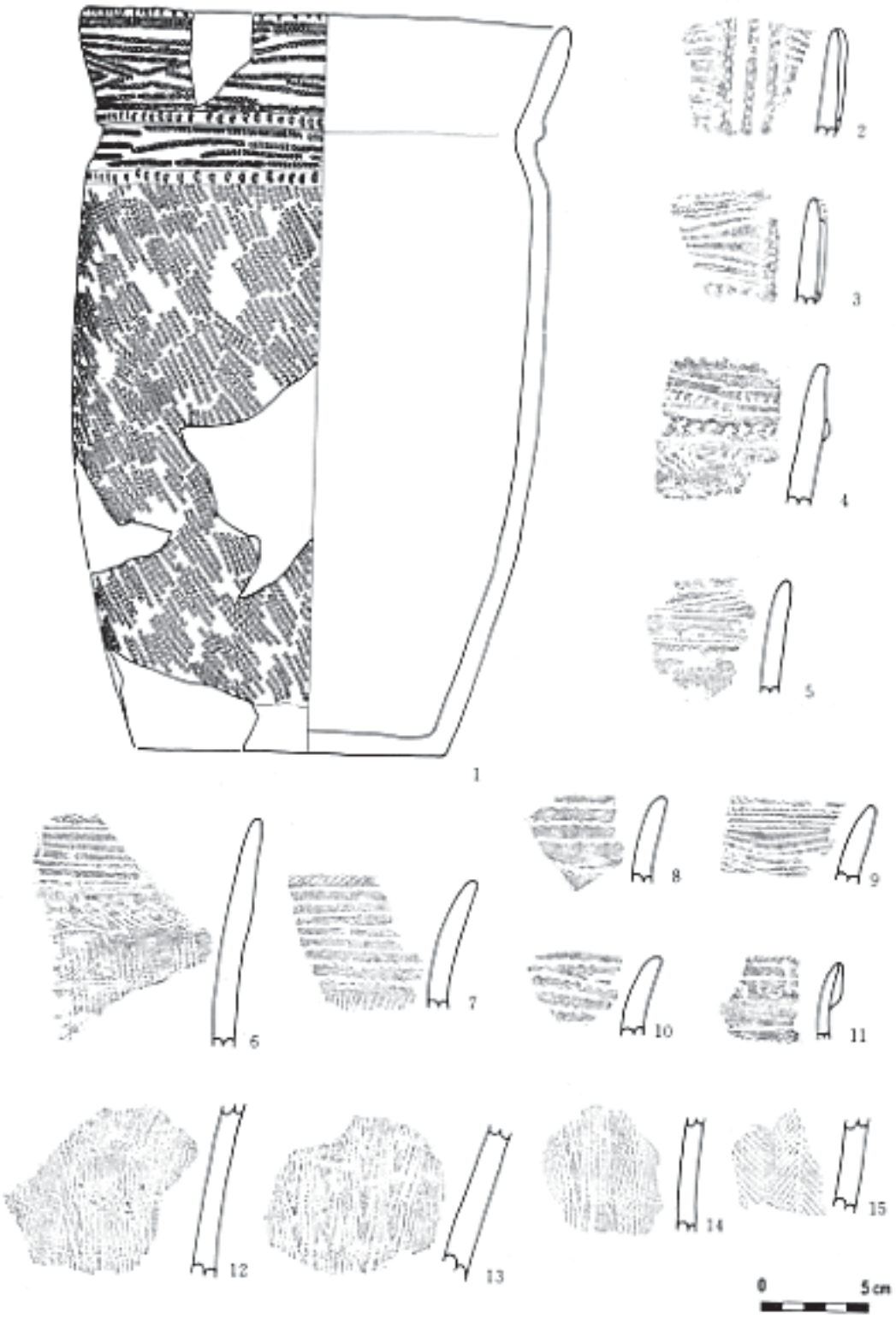
器形は、いずれも口径と底径の差が小さい円筒深鉢形を呈するようで、胴部が直線的に立ち上がり、口頸部が内湾するもの（1）と、口縁部が直線的に外反するもの（2～11）の２種類が認められ、いずれも口縁部の形状は平縁を呈するようである。

文様は、口縁部に横位展開される、単節、無節の縄文原体圧痕文を主要文様としている。口縁部には、無節（5、6、9）、単節（1～4、7、8）の縄文原体圧痕文を平行や斜位に数条押圧して文様を構成しており、中には半裁竹管文を施文しているもの（1、4、5）も認められる。また、同一の縄文原体圧痕文（6）や、棒状の貼付文（2、3）を施文し、口縁部文様帯を縦位に区画しているものも認められる。口頸部に文様を施文し、口縁部と胴郡の文様を区画しているものが２例あり、口縁部と同一文様を施文しているもの（1）と、まったく異なった文様である綾絡文を施文しているもの（6）が認められる。胴部では、施文されている文様が絡条体回転文と縄文原体回転文に大別でき、絡条体回転文では撚糸文（7、12、14）、木目状撚糸文（13）が認められ、縄文原体回転文では単節（4、5）、複節（1、6）の斜行縄文と、羽状縄文（15）が認められる。

これら縄文時代前期の土器の中で、同一の縄文原体を押圧、回転することによって口縁部、胴部の文様を構成しているものは１例（5）のみで、他はいずれも異なった縄文原体を使用し口縁部、胴郡の文様を構成しており、この点が特徴として上げられよう。そしてこれらはいずれも、器形、文様の特徴から円筒下層ｄ式土器に所属するものと考えられる。

江坂輝弥 1970「石神遺跡」森田村教育委員会
三宅徹也 1974「青森県下における円筒下層式土器群の地域展開」北奥古代文化６所収
村越　潔 1974「円筒土器文化」雄山閣考古学選書 10
葛西・山岸 1983「太師森遺跡」平賀町教育委員会

第８図　縄文時代前期の土器



2. 縄文時代中期の土器（第９図）

第Ⅴ層中より前期の土器と混在し、散発的に出土しており、出土量も非常に少ない。

１は、底部から口縁部にかけて直線的に外反する器形をとる深鉢形土器である。口縁郡に４個の小突起を配し無文部とし、胴部に結束の斜行縄文（LR＋LR）を施文しているもので、焼成、調整ともに比較的良好である。

２は、かなりいびつな器形で、部分によって口縁部が内反したり、外反したりしている深鉢形土器である。胴部には単節斜行縄文（LR）を施文しており、焼成は比較的良好であるが、胎土には多量の砂粒、小石を含んでいる。

３は、かなり大型の器形をとる円筒深鉢形土器の口縁部で、山形状の突起部分と思われる。二又に分かれ、肥大した山形状突起で、発達した粘土帯上に撚糸圧痕文を施文し、粘土帯間の空間を埋めるように馬蹄形状の縄文原体圧痕文を施文しているものである。

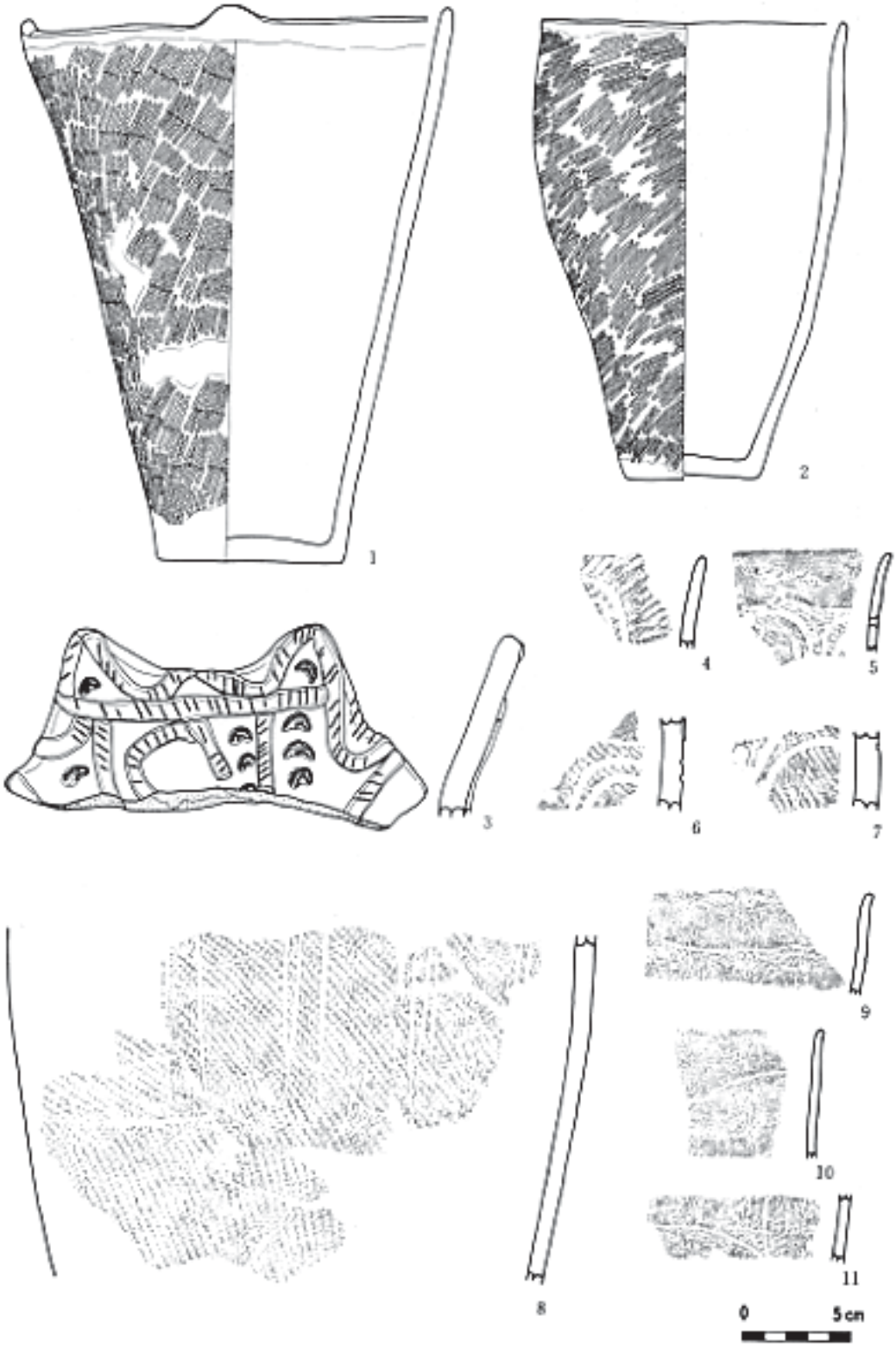
４～８は、縄文地に逆「U」字状に垂下する沈線文を特徴とする深鉢形土器である。いずれも平縁を呈するものと思われ、口縁部を磨消帯とするもの（5）と、粘土帯をもつもの（6）が認められる。５の器面には炭化物が付着しており、いずれも胎土に砂粒を含んでいる。

９～11は、同一個体で平縁を呈する深鉢形土器と思われる。器面は風化によってかなり荒れているため文様は不明瞭であるが、磨消縄文を特徴としているものである。沈線によって口縁部を区画し、曲線の内側に、単節または複節と思われる斜行縄文を施文している。

これら縄文時代中期の土器の所属土器形式であるが、３は、発達した粘土帯、馬蹄形状の縄文原体圧痕文等の特徴から、円筒上層ｂ式土器に所属するものと考えられる。４～８は、垂下する逆「U」字状の沈線文を特徴とするところから、最花式、中の平Ⅲ式土器に所属するものと考えられる。９～11は、磨消縄文を特徴とするもので、井沢遺跡第Ⅱ群土器、大曲１号遺跡出土の所謂山田野Ｂ式土器や孫内遺跡出土の資料に類似しており、縄文時代中期の終末期に所属するものと考えられる。縄文のみが施文されている１、２は、明確な所属形式が不明であるが、１は、円筒上層各形式内に、２は、それ以後の土器形式に所属するものと考えられる。

青森県教育委員会 1974「中の平遺跡」
青森市教育委員会 1973「孫内遺跡」
葛西・高橋 1976「井沢遺跡」平賀町教育委員会
田村誠一 1968「大曲Ⅰ号遺跡」岩木山刊行会

第９図　縄文時代中期の土器



3．縄文時代後期前半の土器（第10図～第14図）

第Ⅳ層を包含層とし、全出土土器の$^{2}/_{3}$以上を占め、本調査区の主要遺物である。器種には、深鉢、鉢形、台付鉢形、浅鉢形、壺形土器等が認められ、内容も豊富である。したがってここでは、器種ごとに器形、文様の観点から概要を述べて行く。

1）深鉢、鉢形土器（第10図1～6、第12図～第14図1～12）

器形は、胴部から直線的に立ち上がり、口縁部がゆるやかに反外するものが多く、口縁部の形状では、平縁のものと波状を呈するものが認められる。施文されている文様の特徴からつぎの6種類に分類される。第1類＝縄文を主要文様とするもの。第2類＝無文のもの。第3類＝網目文を主要文様とするもの。第4類＝沈線文を主要文様とするもの。第5類＝磨消縄文を主要文様とするもの。第6類＝櫛目状の沈線文を主要文様とするもの。

以下、分類に従って述べて行く。

第1類（第10図1、第12図1～4）

縄文を主要文様とするもので、4を除き、いずれも平縁を呈する鉢形土器と考えられ、器表面には単節斜行縄文（LR）が施文されている。4は、折り返し口縁を呈し、その縄文地上に舌弧状の沈線文を横位に施文しており、平縁を呈するものと考えられる。

第2類（第10図4～6、第12図5～7）

無文のもので、器形には、口縁部が直線的に立ち上がるもの（第10図4、第12図5、6）と内反するもの（第10図5、第12図7）が認められる。いずれも折り返し口縁で、口縁郡の形状は平縁を呈するものと考えられる。器面は磨き調整され、全体的に光沢をおびている。

第3類（第10図2、第12図8～17）

網目文を主要文様とするもので、施文方法の違いから、網目状撚糸文と沈線文の2種類に大別できる。第12図8～10は、軸に無節の縄文原体を交互にラセン状に巻きつけ回転させた、網目状撚糸文を施文しているもので、いずれも胴部破片である。

第10図2、第12図11～17は、網目文を沈線文によって作出しているもので、いずれも折り返し口縁を呈するものである。13、14は、口縁部に文様帯をもつもので、沈線を巡らせ胴部文様帯と区画し、舌弧状の沈線文を横位施文している。これら網目状の沈線文の施文順位には規則性がないようで、左右の斜線の前後関係はほぼ同数である。

第4類（第10図3、第13図、第14図9～12）

沈線文を主要文様とするもので、器形では、ゆるやかに口縁部が外反し、波状口縁を呈するもの（第14図）と、平縁を呈し、胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反するもの（第10図3、第14図9～12）が認められる。出土量のわりには全体の文様構成が明瞭なものは少ないも

のの、口縁部のみに文様をもつものと、主要文様が胴部に施文されるものとに大別される。

第13図1～3は、口縁部のみに文様が施文されるもので、円形や舌弧状の沈線文を口縁部に施文し、無文となっている胴部は研磨され光沢をおびている。

第10図3、第13図4～19、第14図9～12は、主要文様が胴部に施文されるもので、舌弧状（第13図4、6、11）、「S」字状（第13図5、10）、波頭状（第10図3）、波状（第13図18、19）等の沈線文を組み合わせて文様を構成している。また、縦位の区画文をもつもの（第13図4、5）や、平行沈線によって数段に文様帯を区画し、同一文様を横位展開しているもの（第10図3、第13図8）が認められ、中には第13図8のように主要文様が連結して縦位の区画文となっているものも認められる。特殊なものでは彩文土器（第13図6）が認められる。焼成以前に文様の主要部（拓影の濃い部分）に顔料を塗ったものと考えられ、赤褐色を呈している。

第5類（第14図1～4）

磨消縄文を主要文様とするもので、出土数は4点のみである。1、2は、口縁部及び口頸部片で、口縁部を立体的に装飾した粘土紐上に縄文を施文しているものである。3、4は、いずれも胴郡片で、文様の構成は不明であるが、磨り消し手法によって、舌状の区画文を施文しているものである。

第6類（第14図5～8）

櫛目状の沈線文を主要文様とするもので、5、6は同一個体である。いずれも口縁部片で、山形状の小突起をもち、櫛目状の沈線文を施文している。7、8は胴部片で、沈線文によって区画された内側に疑似縄文風に櫛目状の沈線文を施文しているものである。

2）台付鉢形土器（第10図7）

口縁部及び台部を欠損する台付鉢形土器で、胴部がまるみをもち、口縁部が外反するものと考えられる。平行沈線によって文様帯を区画し、波頭状及び舌弧状の沈線文を主要文様とし横位展開させているもので、器面には赤色顔料の付着が認められる。

3）浅鉢形土器（第10図8、第11図1、2、第14図13～23）

いずれも沈線文のみで文様を構成しているもので、器形には、胴部が直線的に外反し、口頸部が「く」の字状に屈曲するもの（第10図8、第11図2）と、口縁部がゆるやかに外反するもの（第11図1）が認められる。文様は、口縁部と胴部に区面され、口縁部文様帯には、2、3条の平行線のみを施文するもの（第10図8、第11図2、第14図17～19）と、平行線間を舌弧文（第14図13～15）や「S」字状の沈線文（第14図16）で連結するものが認められる。胴部文様帯では、自由奔放な曲線文を施文するもの（第10図1、第14図21）と、波頭状（第10図8、第11図2、第14図18、19）や舌状（第14図20、22、23）の沈線文を数段に重ねて施文しているものが認められる。また、特殊なものとして彩文土器（第14図22）が認められる。

4）壺形土器（第11図3～7、第14図24～30）

いずれも沈線文を主要文様とするもので、器形には、口縁部が外反するもの（第11図3）と口縁部が浅鉢形にふくらむもの（第11図4、5）が認められる。口縁部の形状には、平縁を呈するもの（第11図5）と2個の山形状の小突起をもつもの（第11図3、4）が認められ、胴郡の文様は、舌状や波頭状の沈線文の組み合わせによって構成されている。第11図6は、特殊な壺形土器で、焼成以前に胴部上面を切断し、切断部と胴部を紐で固定したと考えられる有孔突起をもつものである。

5）その他の土器（第11図8、9）

いずれも器種は不明であるが、底部に小さな台（脚）を複数もつと考えられるもので、9は、台（脚）の位置から推定して、底部が楕円形を呈し、4個の台（脚）をもつものと考えられる。

さて、これら沈線文を主要文様とする、縄文時代後期前半の土器の所属土器形式であるが、器形、文様の特徴から、磨消縄文をもつ一部のものを除き、いずれも縄文時代後期前半に編年位置づけられる十腰内1群土器に所属するものと考えられる。

近年、十腰内1群土器は、その資料の増加にともない、細分についての論考が数々提示されており、分類基準は別として、おおむね新古の2タイプに分類されるようである。ごく簡単に器形（鉢形土器）、文様についてまとめてみるならば、以下のように理解されよう。

古：器形では、胴部最張部がほぼ中央に位置し、口縁郡ゆるやかに外反する傾向にあり、文様帯が胴部下半にまでおよび、平行線によって数段に区画されるものも認められる。文様では、縦位の区画文をもち、特徴的文様には網目状の撚糸文が上げられる。

新：器形では、胴部最張部が上方に位置し、肩部を作出しているものも認められ、口縁部が直線的に外反する傾向がある。文様帯は、胴部上半に位置し、一段の平行線間に凝縮され、文様はその間に横位展開され、櫛目状の沈線文が出現する。

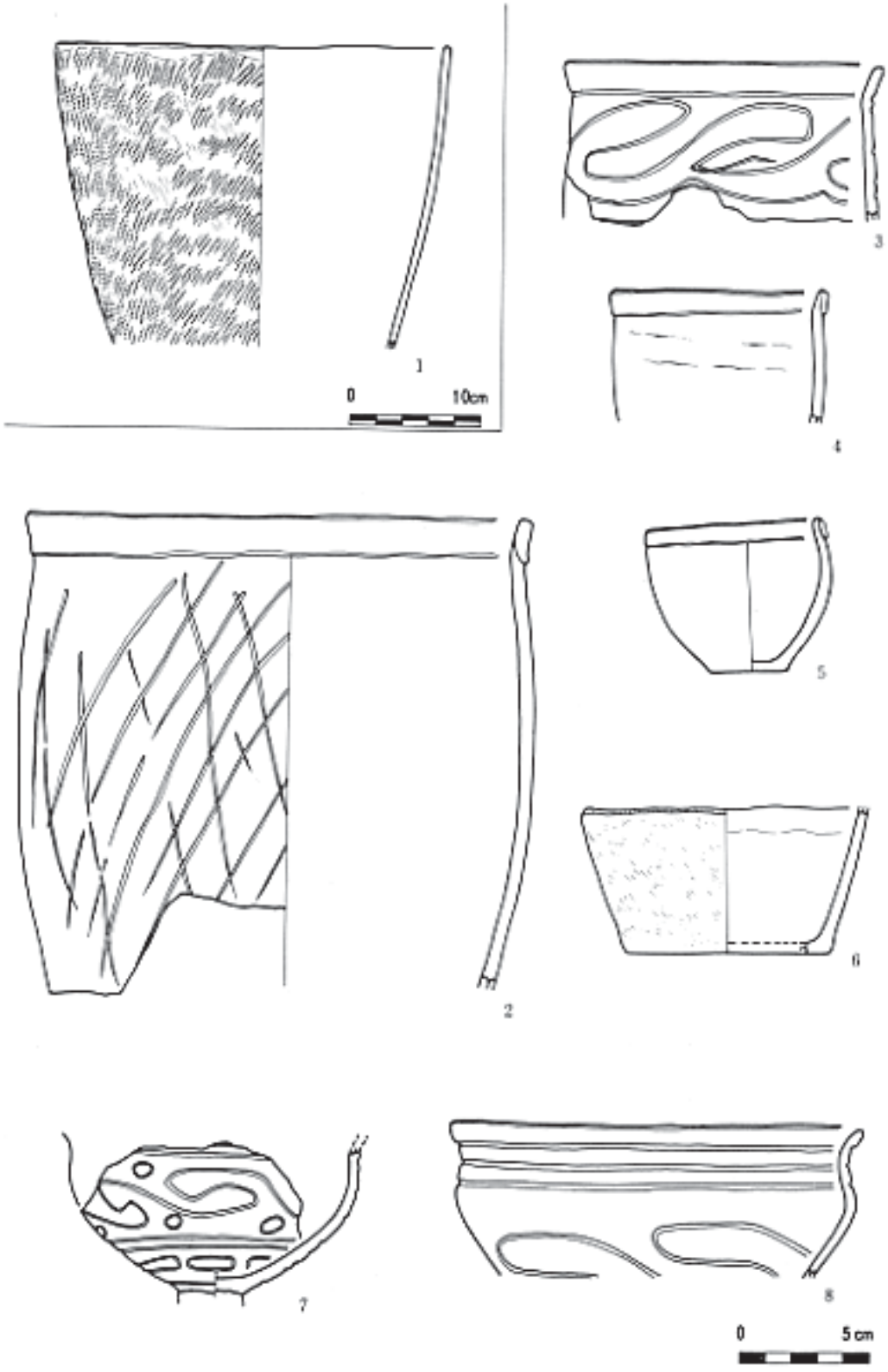
以上の事柄を踏まえ、本調査区出土の十腰内1群土器を観察するならば、器形、文様のいずれにも古いタイプの要素をもつものが多く認められる。しかし、鉢形土器の第6類としたもののように、新しいタイプに出現する文様が認められることや、古いタイプの要素に含まれるものの中にも、網目状の文様のように撚糸文が沈線文化したり、波頭状の沈線文のように横位展開される傾向にあるものなどが認められる。したがって本調査区出土の十腰内1群土器は、古いタイプの要素を多く含み、新しいタイプへの移行期に所属するものと考えられる。

今井、磯崎1968「十勝内遺跡」岩木山刊行会

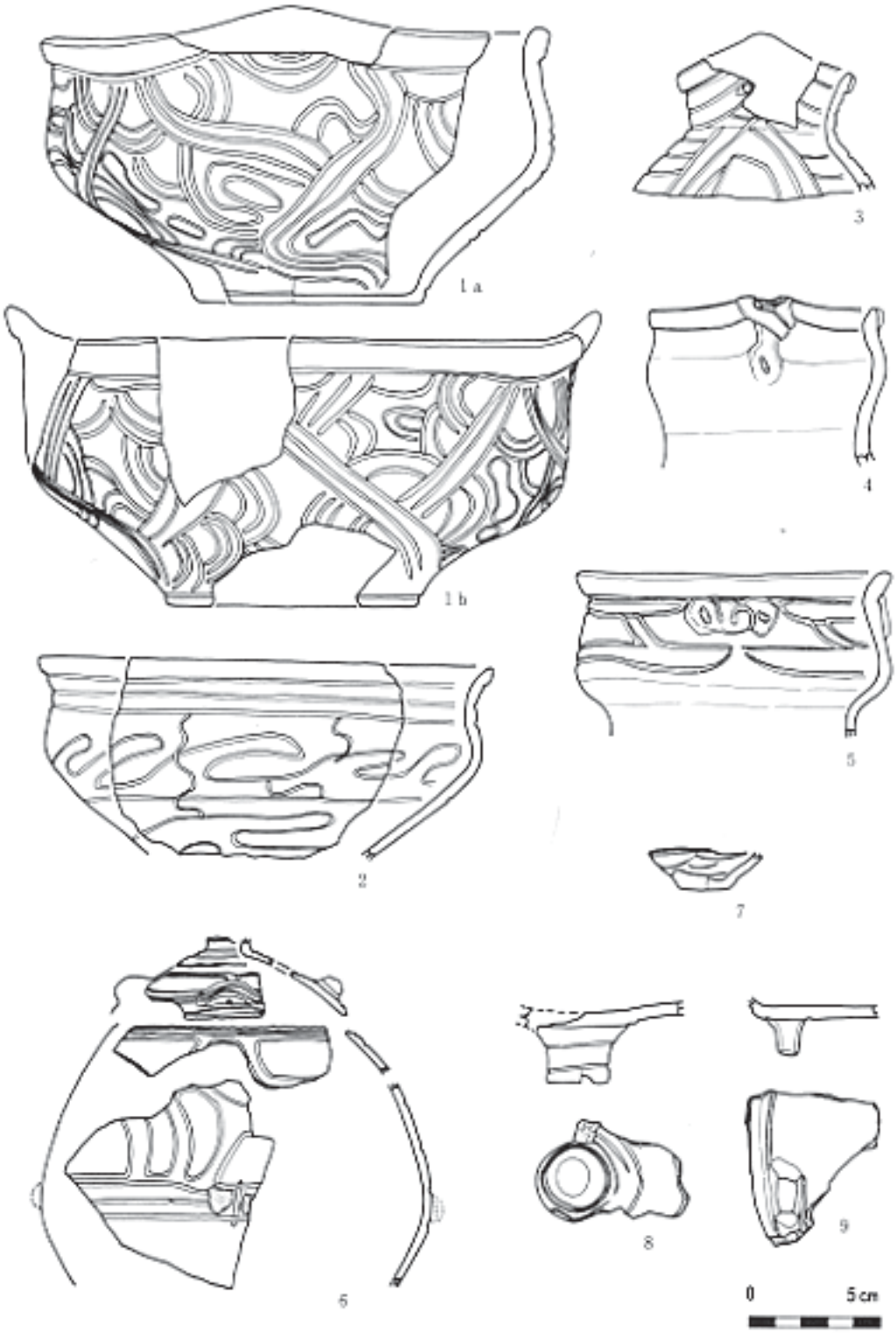
葛西　励1973～1975「青森市周辺の後期縄文土器」（3～5）うとう80号～82号

葛西　励1979「十腰内1式土器の編年的細分」北奥古代文化11所収

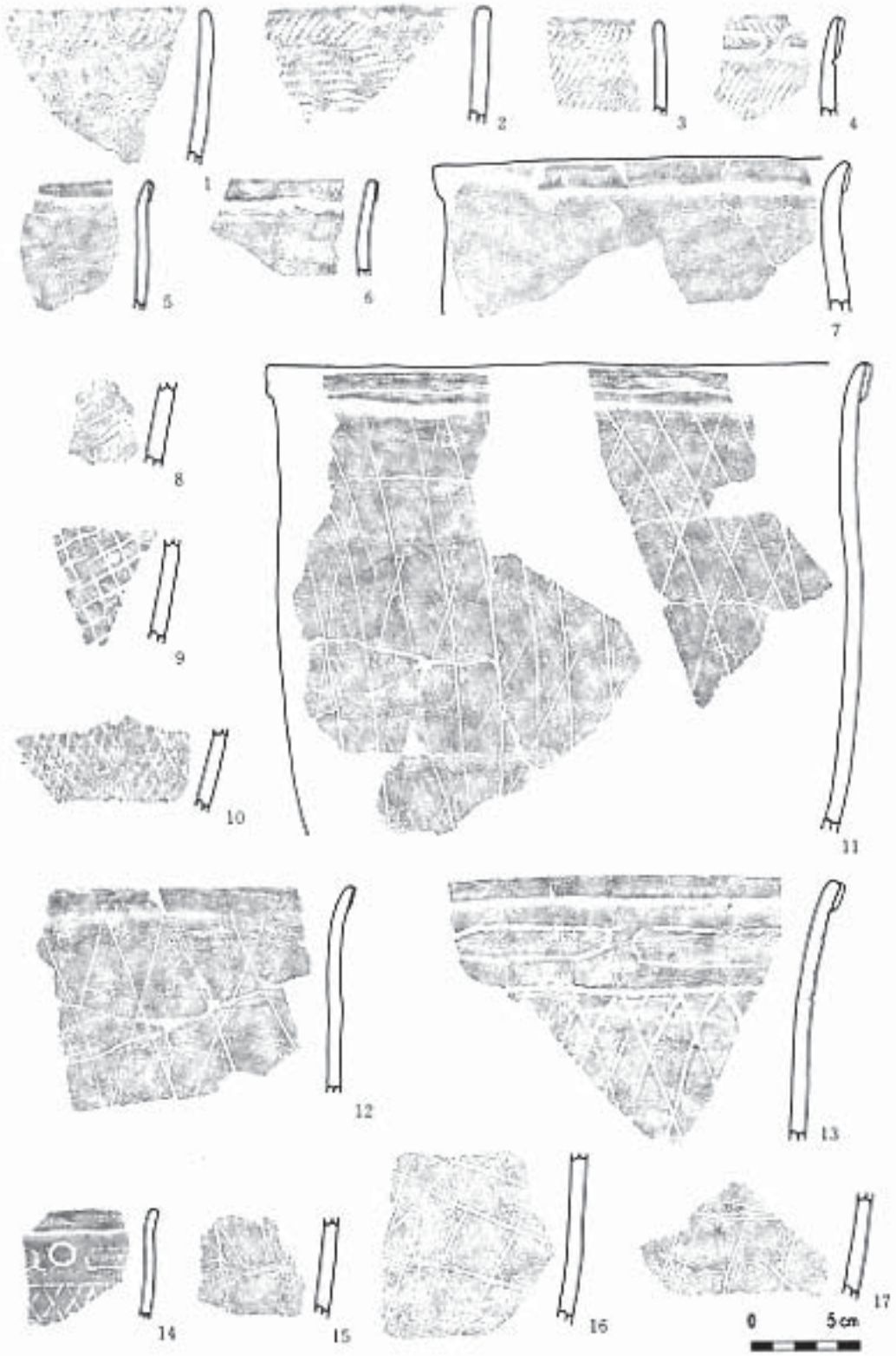
第10図　縄文時代後期前半の土器(1)



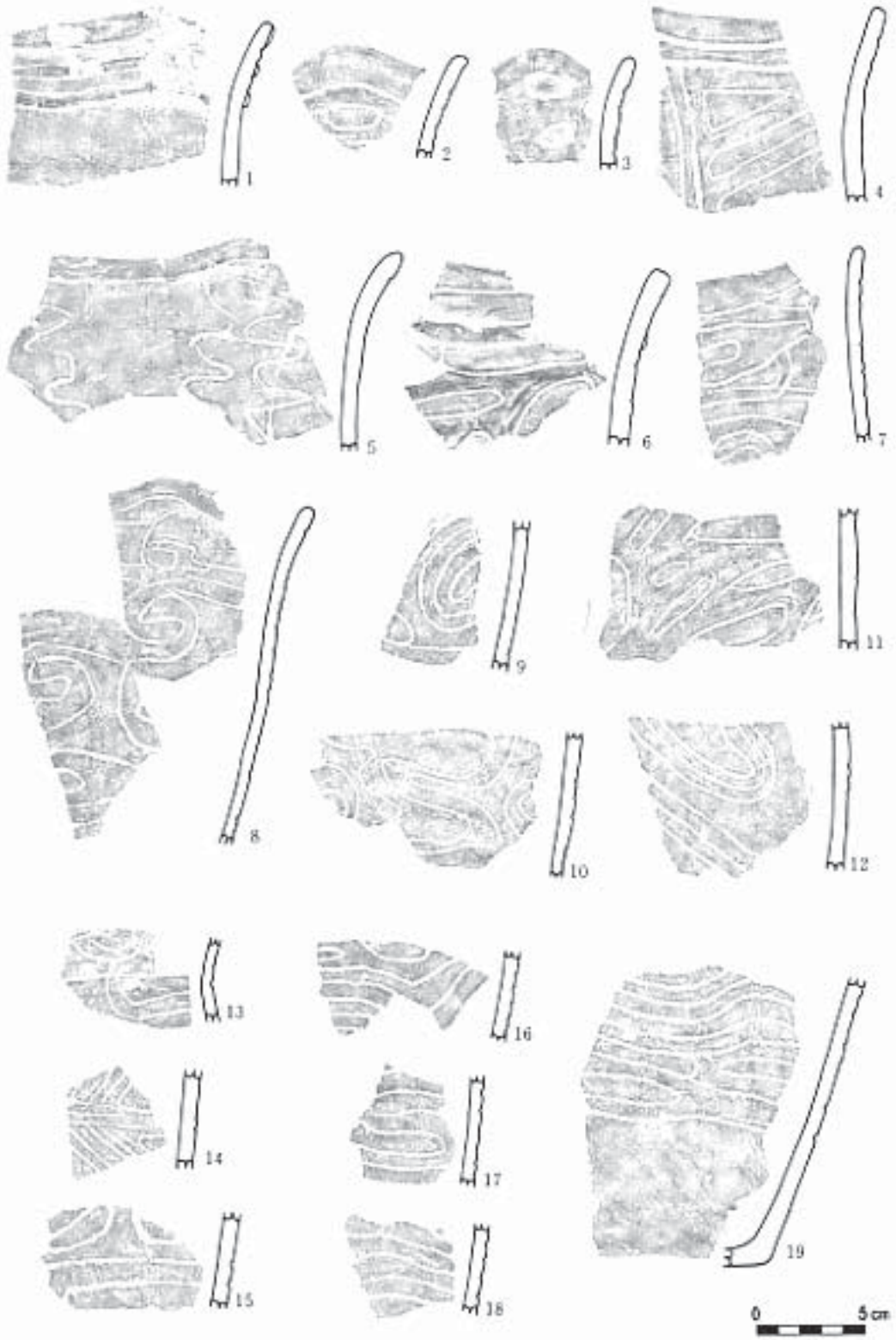
第11図　縄文時代後期前半の土器(2)



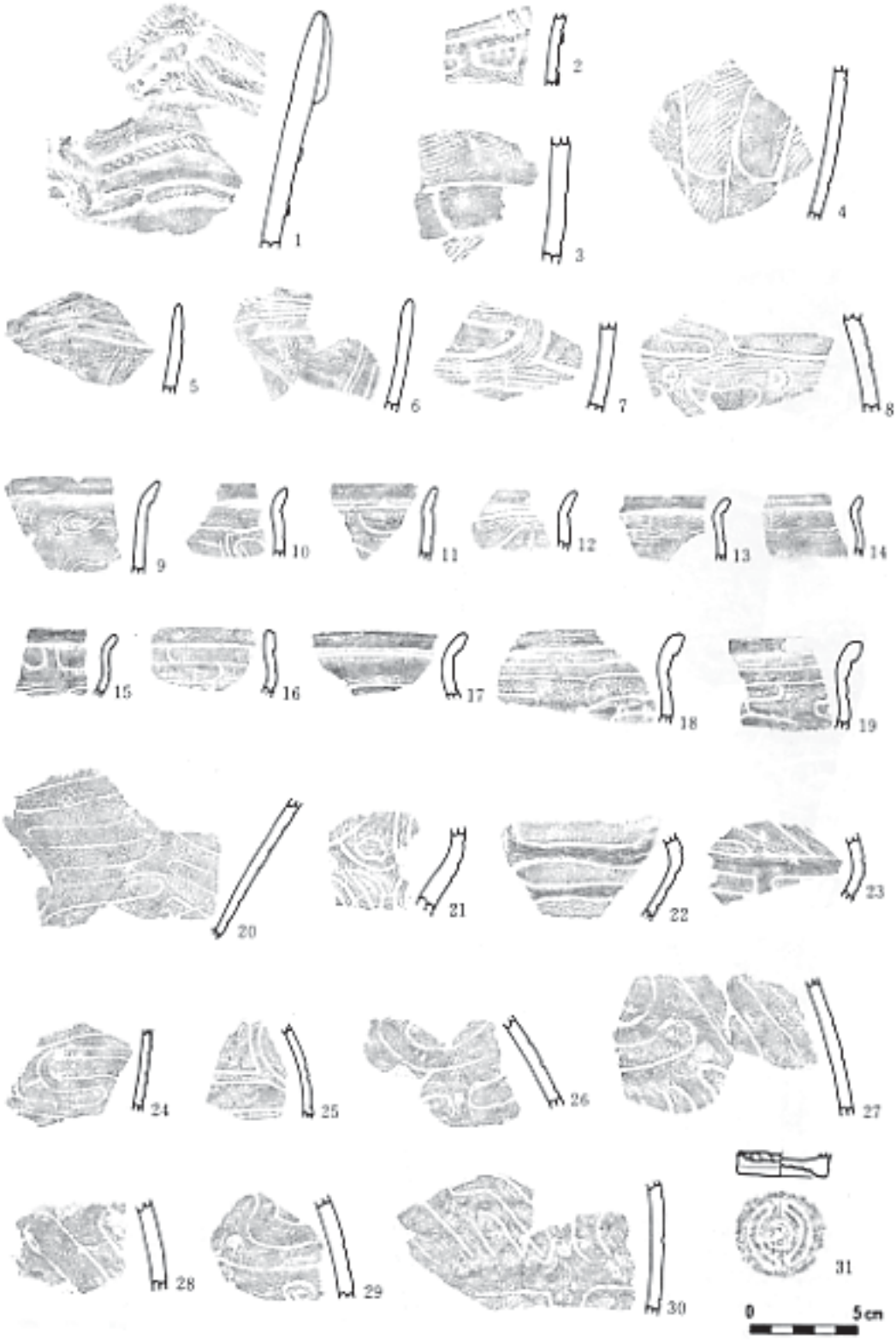
第12図　縄文時代後期前半の土器(3)



第13図　縄文時代後期前半の土器(4)



第14図　縄文時代後期前半の土器(5)



4. 縄文時代後期後半の土器（第15図）

第Ⅱ層を主要包含層として、出土量は縄文時代後期前半の土器についで多く、貼瘤文を特徴とするもので、器種には、鉢形、壺形、注口土器が認められる。以下、器種ごとに概要を述べて行く。

1）鉢形土器（1、6～10）

器形では、口縁部がゆるやかに立ち上がりやや内反するものと、胴部にくびれをもち口縁部が「く」の字状に外反するものが認められる。

1、6～9は、口縁部がゆるやかに立ち上がりやや内反する器形をとるものである。1は、不規則は小波状口縁を呈し、胴部には無節の斜行縄文を施文しているもので、6～9は、平縁を呈し、胴部に羽状縄文を施文しているものである。

10は、胴部にくびれをもち口縁部が「く」の字状に外反する器形をとるもので、平縁ないし山形状の突起を有するものと思われ、無文の胴部には大柄な貼瘤が配置されている。

2）壺形土器（2、3）

2は、小さな台部をもち、胴部が球形を呈し、口頸部がくびれ、口縁部が内反する器形をとるもので、胴部の上下両端には、口縁部と台部を区画するように沈線を巡らせている。3は、胴部最張部が中心より上方に位置し、口頸部が直線的に立ち上がる器形をとるもので、2と同様に小さな台部をもち、胴部の上下両端に沈線を巡らせている以外は無文である。

3）注口土器（4、5、11、12）

4は、「く」の字状に大きく外反し、平縁を呈する口縁部で、浮彫的手法によって縄文帯を形成し、口縁郡上端に等間隔の貼瘤を配置しているものである。5は、胴部上半を欠損しているもので、底部は揚げ底を呈し、胴部には浮彫的手法による木葉状の磨消縄文を施文し、その接点に大小の貼瘤を配置しており、注口部の接合部には補修に使用されたと思われるアスファルトの付着が認められる。11、12は、胴部下半及び上半の破片で、12の口縁部との破損面にもアスファルトの付着が認められる。

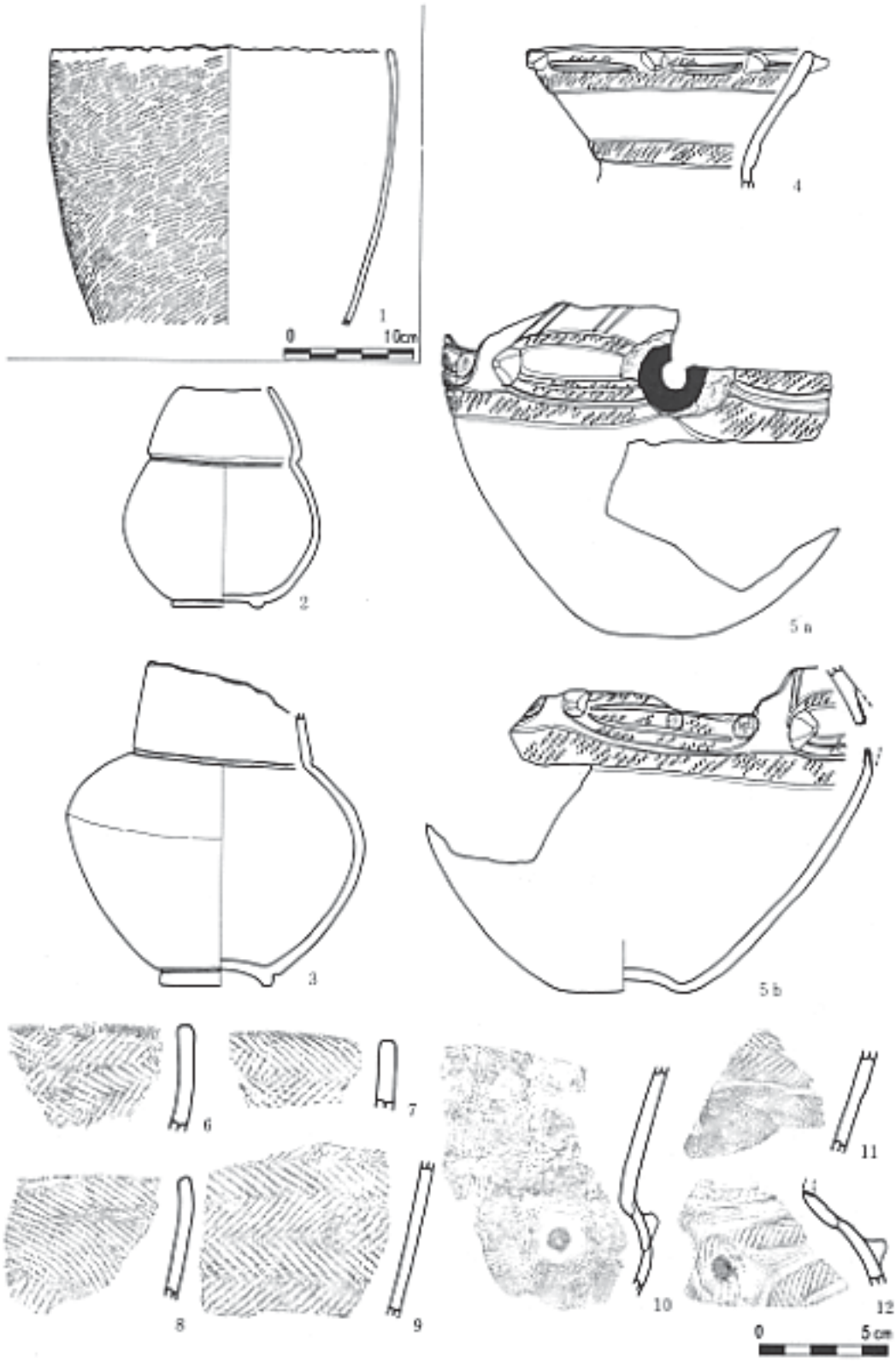
これら縄文時代後期後半の土器の所属土器形式であるが、浮彫的手法の磨消縄文と貼瘤を特徴とするところから、所謂「貼瘤文土器」の終末期に位置する十腰内Ⅴ群土器に所属するものと考えられる。（山岸　英夫）

青森県教育委員会1976「水木沢遺跡発掘調査報告書」

今井・磯崎1968「十腰内遺跡」岩木山刊行会

葛西　励1979「第6章　後期編」『蛍沢遺跡』青森市費沢遺跡発掘調査団

第15図　縄文時代後期後半の土器



5. 縄文時代晩期の土器

1. 壺　球状の体部を有し、ほぼ中央に最大径がある。口頸部、口縁部とも磨消しておりよく研磨されている。肩部に入組状の三叉文、胴部に単節の縄文を施し、頸部は「〔」字形に三段になり、それぞれの区画を一本の沈線によっている。大洞B式

2. 壺　胴部単節の斜縄文、頸部は「く」の字形に外反しながら口縁に至る。頸部は1と同様の作りでよく研磨されている。大洞B式

3. 注口土器　山形突起を呈し、突起下正面に文様が大胆に強調されている。大洞B式

4. 台付鉢形土器と思われ、頸部と胴部は一本の沈線によって区画され、1、2の壺と同様の作出手法がみられる。大洞B式

5. 6. 鉢形土器　数条の沈線文間に羊歯状文が崩れた連続刻目文を施文している。大洞B－C式から大洞　C_1式への移行期か。

7. 8. 鉢形土器　羊歯状文の名残りが強く大洞B－C式の範疇であろう。

9. 注口土器　大洞B－C式

10. 壺　肩部で雲形文が描かれ大洞C_1式の所産であろう。

11. 台付鉢　山形の波状口縁をなし、矢羽根状沈線文が描かれ、大洞A→A′の所産であろう。

12は11と同一個体で器台肩部

6. 土製品

13. 有孔土製品　ハ字状の沈線が刻まれており、真中に棒状ものを通して引き抜いたような、孔が穿っている。

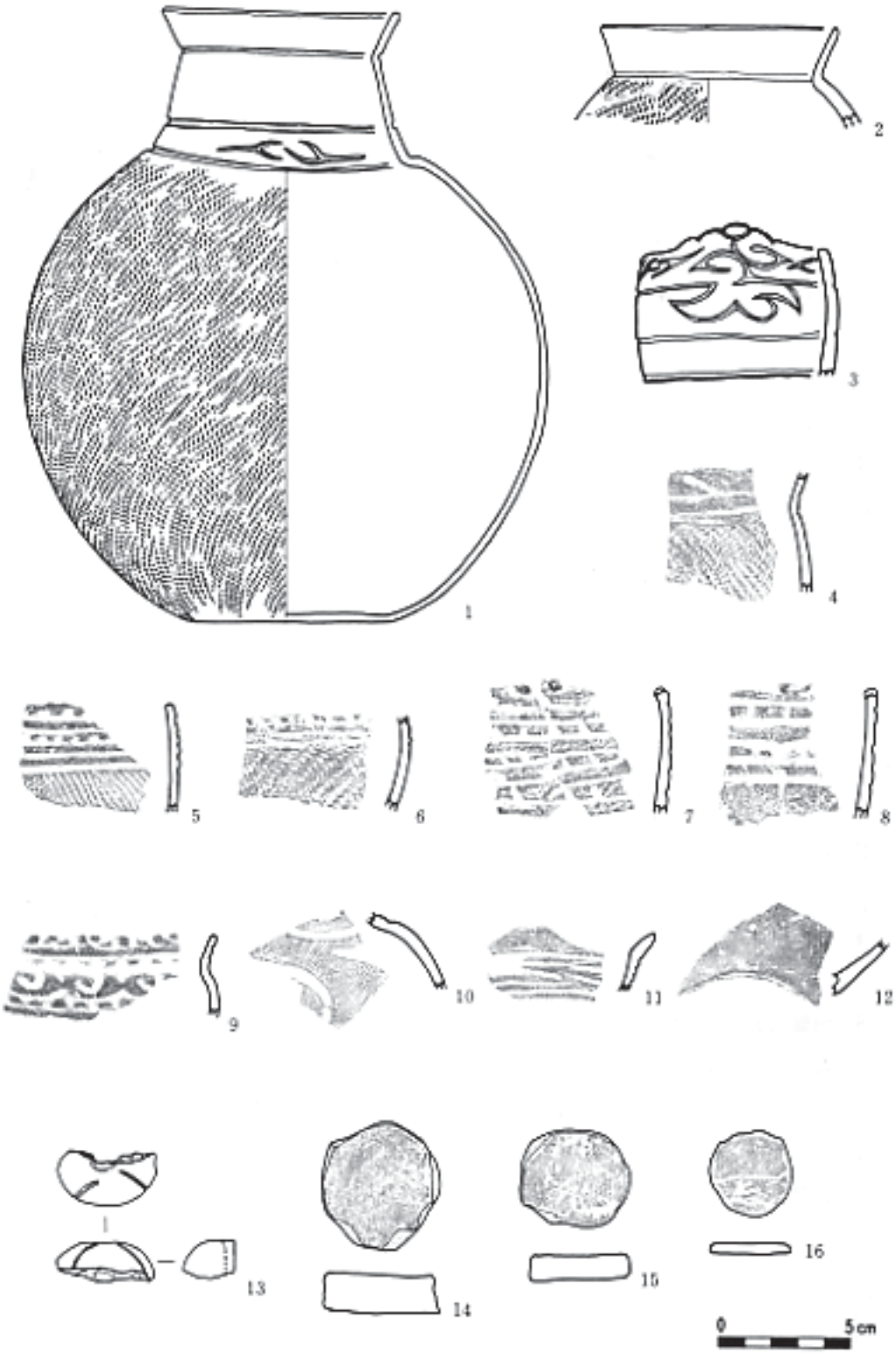
14. 15. 円盤状土製品　土器底部を利用したものである。薄厚の差はあるが、作出は同様である。

16. 円盤状土製品　沈線を有する胴部破片を利用している。

13～16の土製品は出土層位及び文様等から縄文時代後期初頭の所産と推考される。

なお13について、「縄文文化の研究」、第9巻1983。雄山閣、で小島俊彰氏は「有孔球状土製品」として解説しているものに類似していると観察されるものであるが、一品の破片だけで、対比するのが無理なものであろうか。　（塩谷　隆正）

第16図　縄文時代晩期の土器、土製品



7. 石器・石製品（第17図、第18図）

本調査によって検出された石器、石製品の総数は、12種類27点である。各時期ごとの石器組成を明確にすることは不可能であるため、器種ごとに概要を述べて行く。ただし、ここで使用する石器、石製品の名称は慣用的な呼称を用い、分類は形態的特徴によって個々に細分した。

1）石鏃（第17図1～5）

出土数は5点で、いずれも有茎石鏃である。1、2は、ほぼ二等辺三角形を呈し、逆刺しの形状が「T」字形をとるもので、入念な剥離調整が全面に及んでいる。3は、1、2に比べて逆刺しが弱く「Y」字形をとるもので、剥離調整は全面に及んでおり、茎部にはアスファルトの付着が認められる。4、5は、逆刺しが弱く丸身をおび、ほぼスペード形を呈するもので、いずれも周辺加工によって剥離整形され、中央部に素材の剥離面を大きく残している。4の茎部にはアスファルトの付着が認められる。

2）石匙（第17図7）

平坦打撃面を残す翼状形の剥片を素材とし、その先端部につまみを作出しているもので、刃部は片面加工によって一側縁に作出されている。つまみは、両面加工によるものの概して雑な作出となっている。

3）掻器（第17図8、9）

出土数は2点である。8は、縦長剥片を素材とし、先端部に刃部を作出しているもので、その形状から「先刃掻器」と考えられるものである。9は、かなり厚手の剥片を素材としているもので、刃部は「樋状剥離」様の両面加工によって急傾斜の鈍い角度に作出されている。

4）削器（第17図10～13〉

出土数は4点である。いずれも縦長剥片を素材として、刃部は鋭く作出されている。10、11が、側縁に連続した剥離調整が施されているのに対して、12、13は、側縁の一部に簡単な剥離が加えられているだけのものである。

5）その他の剥片石器（第17図6）

先端部を欠損しているもので、厚みを取るための雑な剥離調整が加えられ、円形に整形されており、削器ないしは石錐と考えられるものである。

6）石斧（第17図14）

頭部を欠損する磨製石斧で、入念な研磨調整は刃部を主として全面に及んでいる。胴部には使用によると思われる細かな敲打痕、擦痕が認められる。刃部では特に擦痕が顕著で、丸身をおび鋭さを失っている。

7）石皿（第18図1）

破損品で、全体の形状は不明であるが、ほぼ楕円形を呈するものと考えられる。周縁の作出は顕著でなく、平坦なすり面には、使用による磨滅が僅かではあるが認められる。

8）敲打石（第18図2）

楕円形を呈する礫を素材とし、両側縁と長軸の下端に打痕をもつもので、かなり細かな敲打によって作出されている。

9）擦り石（第18図3、4）

3は、楕円形の礫を素材とし、両側縁を擦り面としているもので、直線的にかなり擦りこまれており、断面形はほぼ四角形を呈している。4は、ほぼ球状の円礫を素材とし、長軸の両端を擦り面としているもので、下端の擦り面は大きく、かなり使用されたものらしく磨耗し、若干の光沢をおびている。

10）くぼみ石（第18図10～13）

出土数は4点で、盲孔が片面のみのものと両面に認められるものがある。10、11は、盲孔が片面のみに認められるもので、いずれも平坦面に粗雑な盲孔が作出されている。12、13は、両面に盲孔が認められるもので、ほぼ中央に向きあう形で盲孔が作出されている。

11）球状石製品　（第18図5～8）

出土数は4点である。細かな敲打整形によって球状に加工しているもので、用途については不明であるが、形状から投てき用の石弾とも考えられるものである。

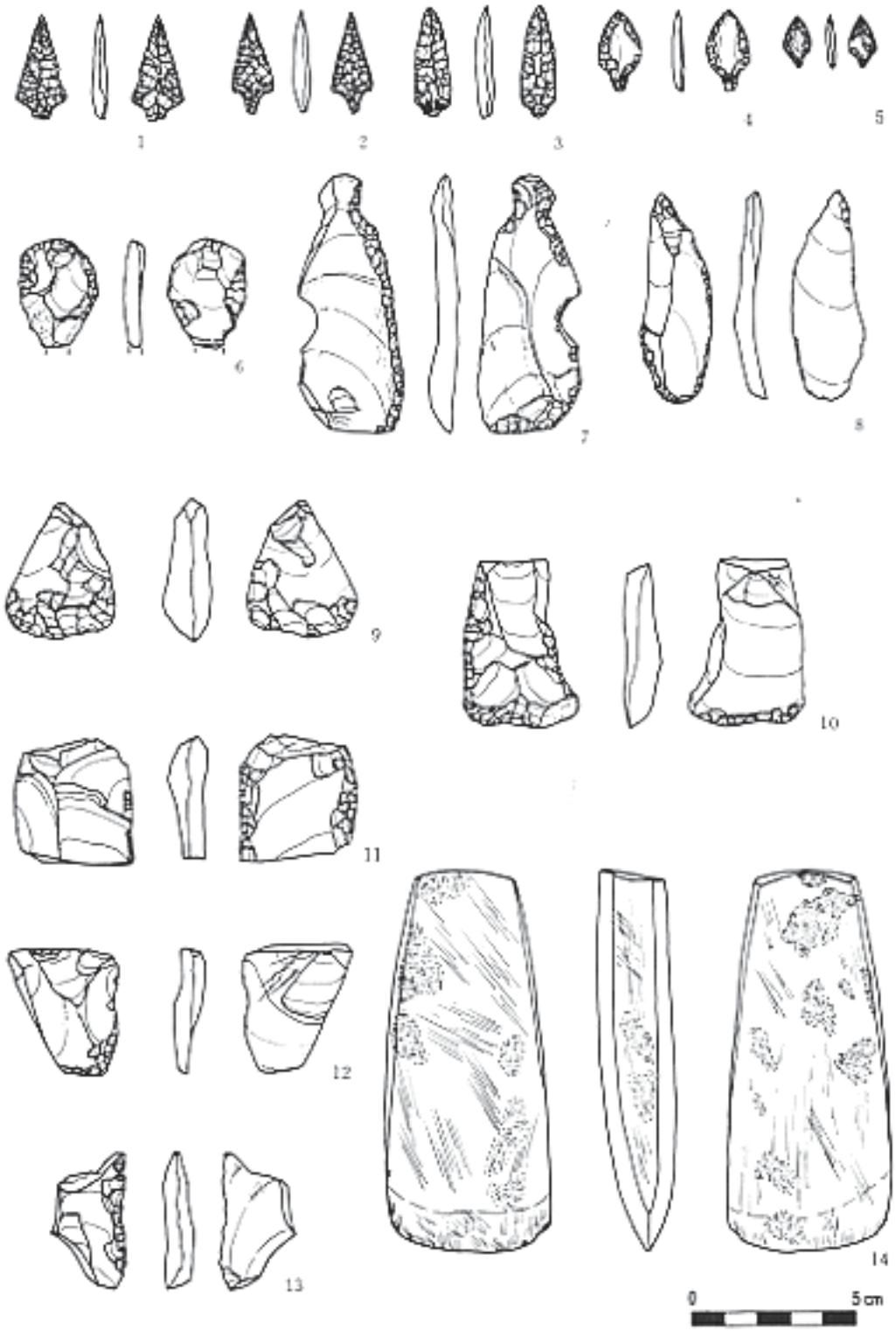
12）円盤状石製品（第18図19）

偏平な自然石を素材とし、周縁を敲打整形し円形に加工しているもので、上下平坦面及び敲打面の一部を研磨しているものである。

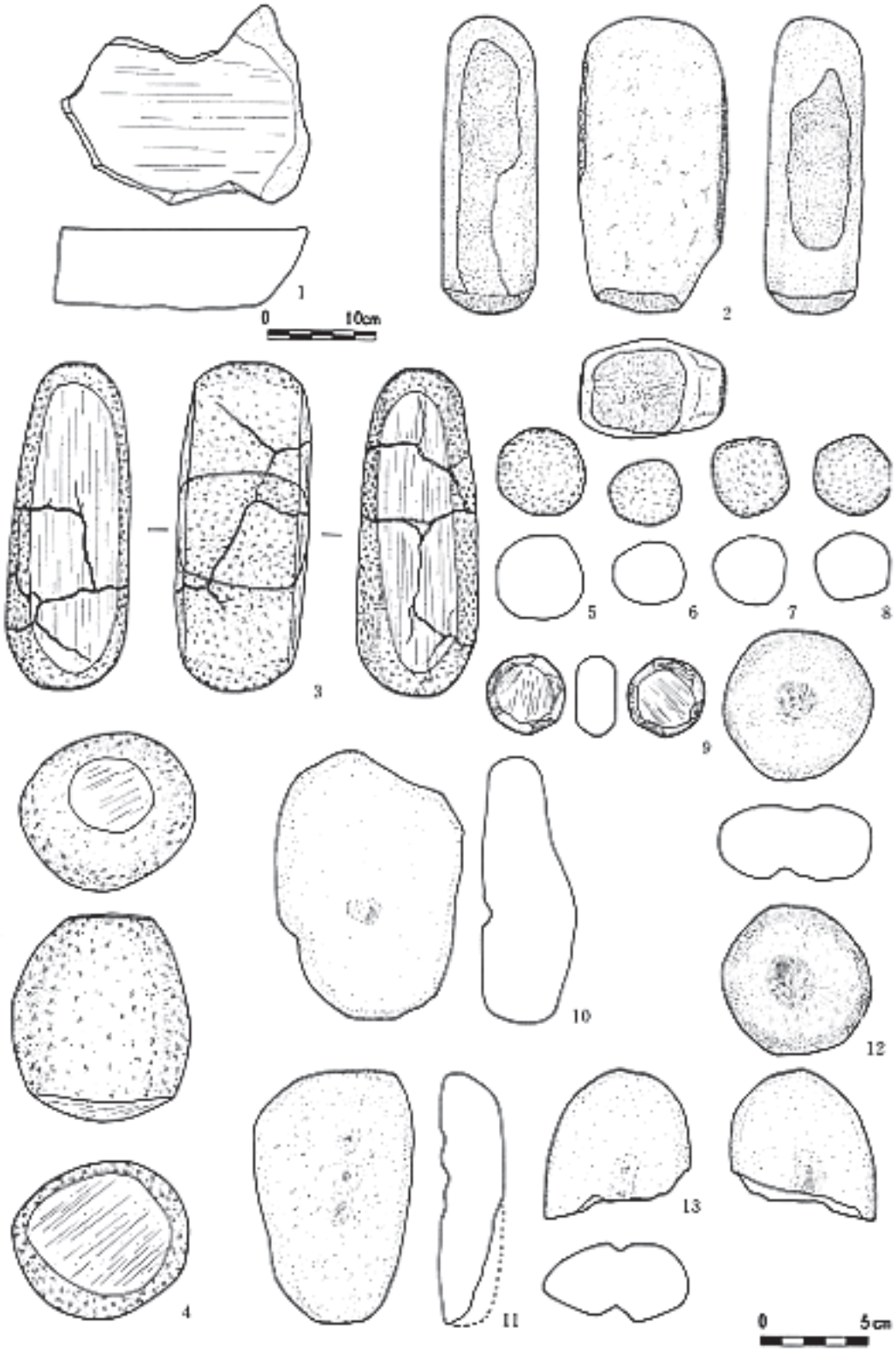
これら石器、石製品の所属時期であるが、炉跡付近より縄文時代後期前半の土器と共に出土した石鏃（第17図2～4）及び、縄文時代晩期の土器と共に出土したくぼみ石（第18図12）を除き、いずれも明確さに欠けるものの、土器の出土量からみて大半の石器、石製品は縄文時代後期前半に所属するものと考えられる。

（山岸　英夫）

第17図 石 器(1)



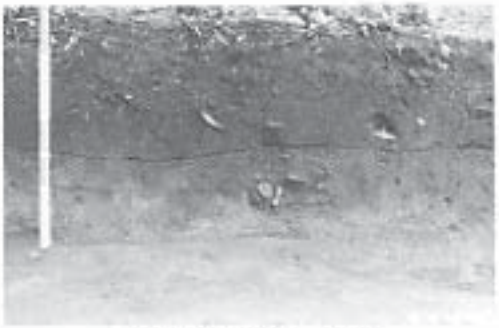
第18図　石　器(2)



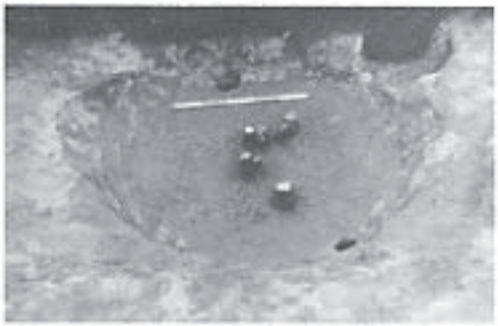
A地区遠景（北方より）

B地区遠景（南方より）

A地区基本層序（A－3区）

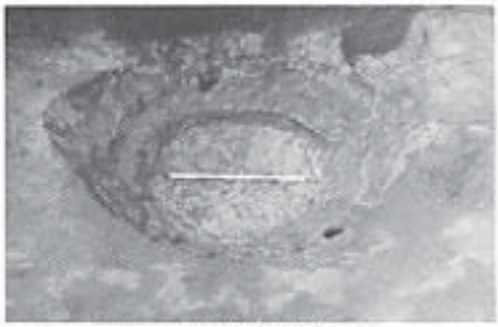


B地区層序（B－1区）

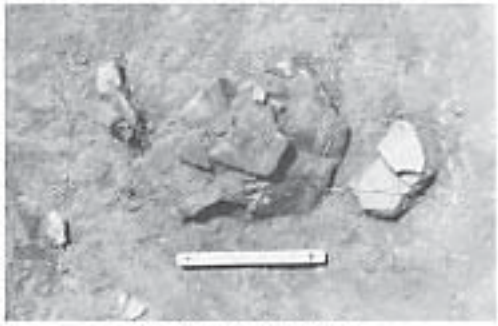


第1号住居跡

第2号住居跡

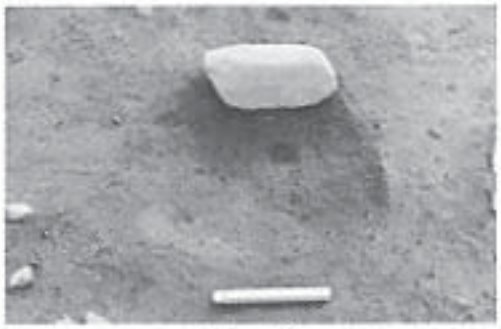


同上完掘状態

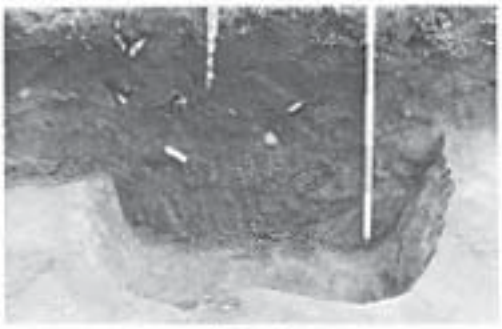


同上遺物出土状態

PL I



炉　跡



土　坑

遺物出土状態（縄文時代中期）

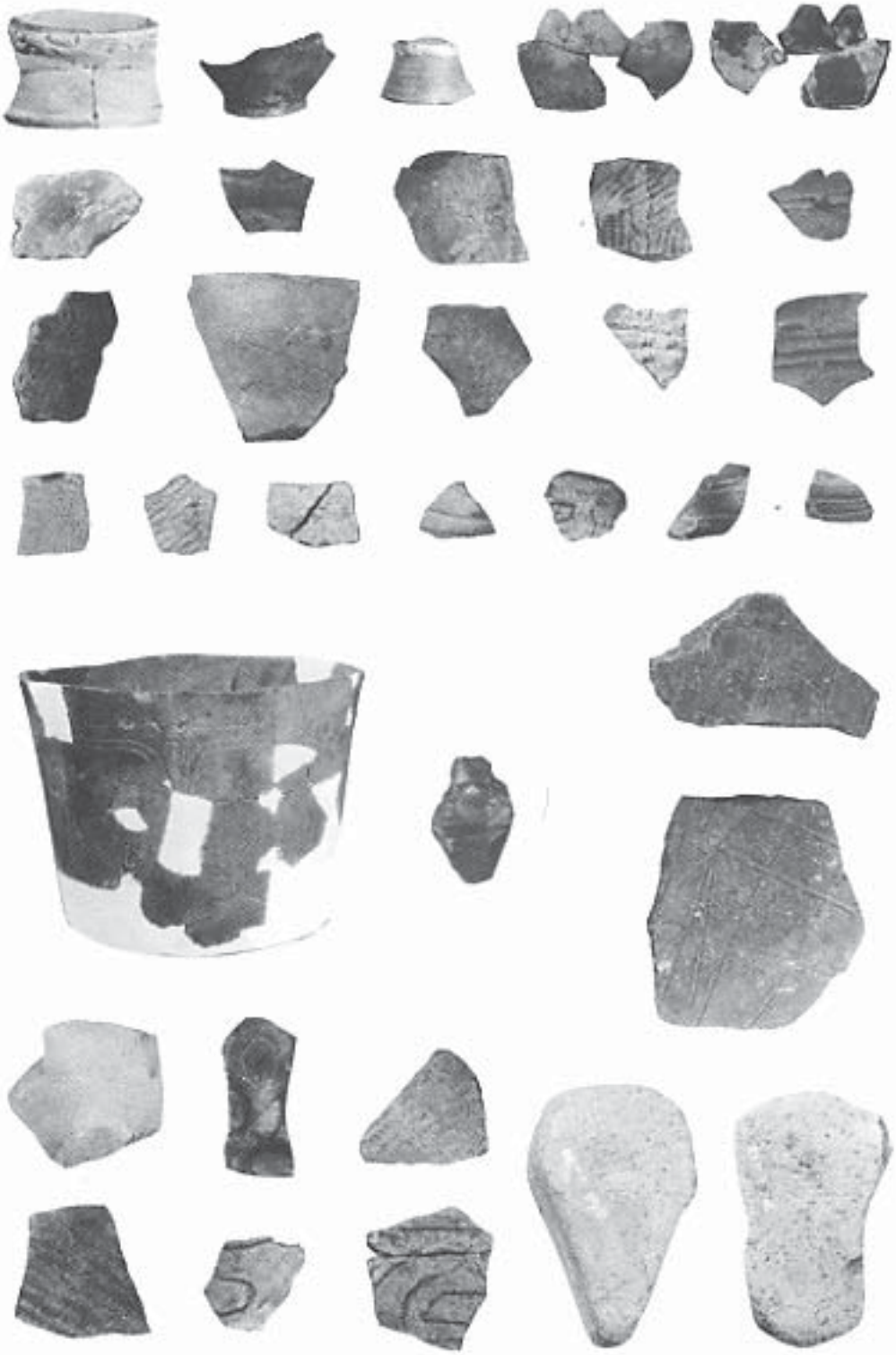
遺物出土状態（縄文時代後期前半）

同上（縄文時代後期前半）

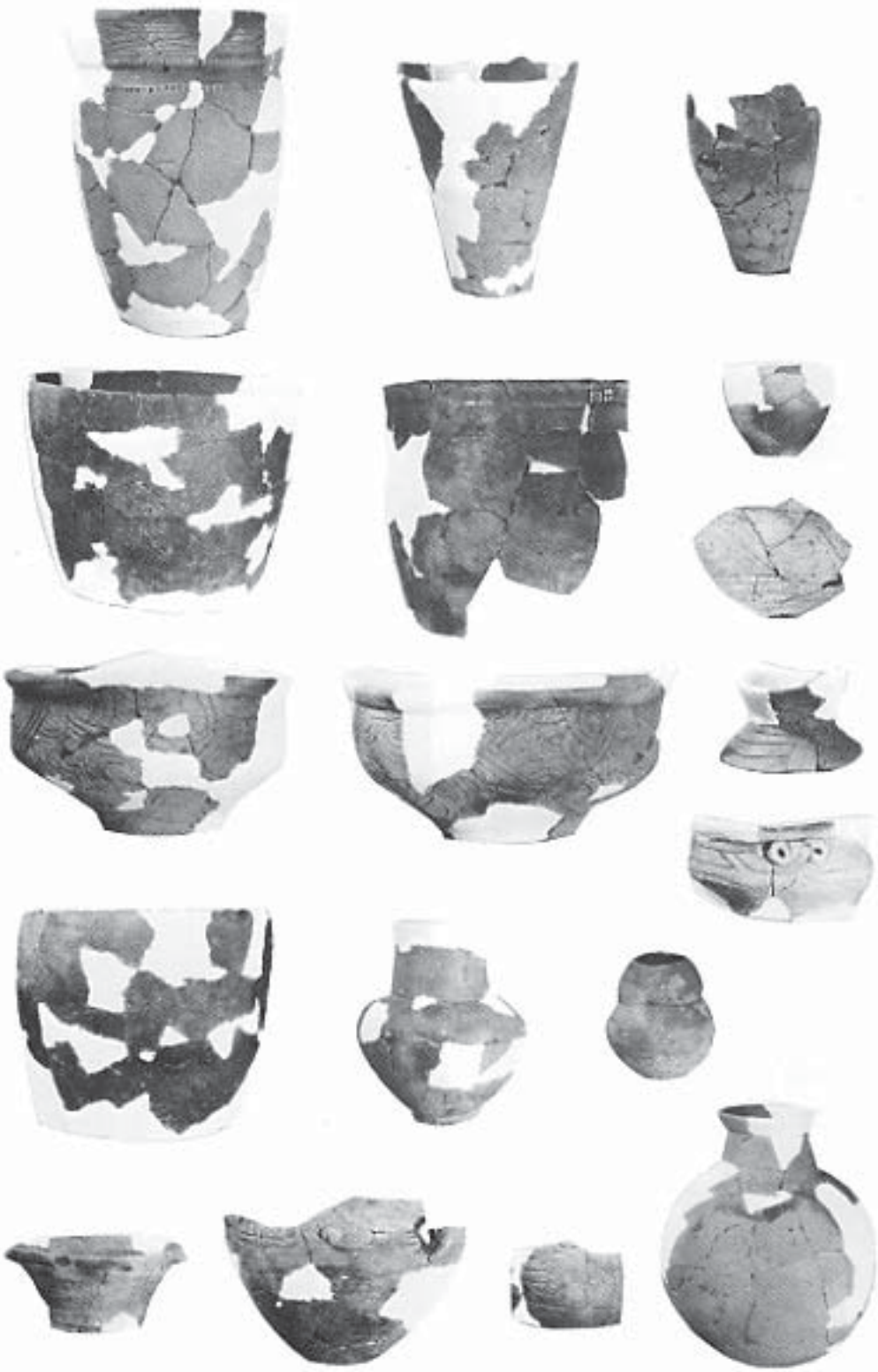
同　上

同上（縄文時代後期後半）

同上（縄文時代晩期）

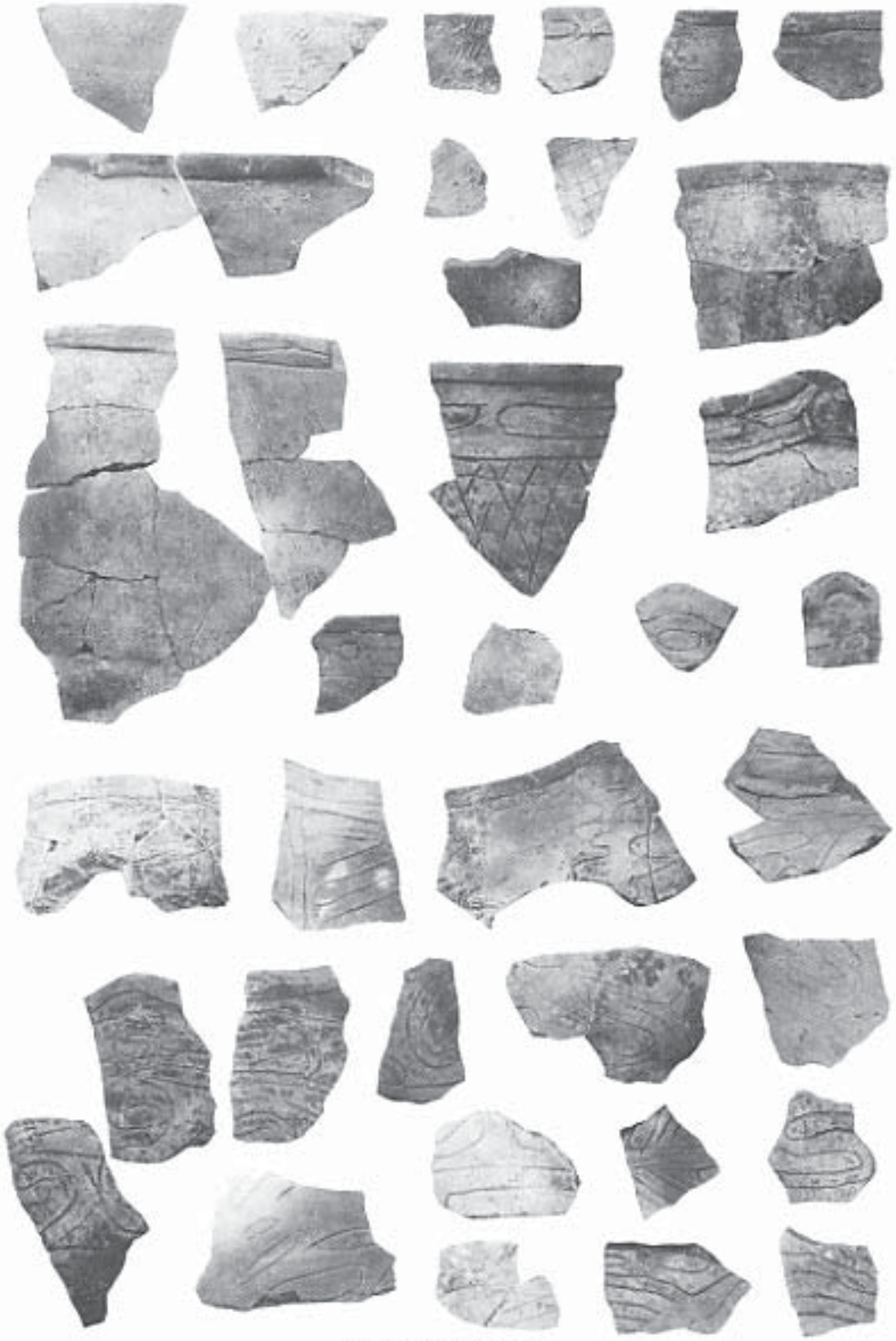


ＰＬ３　遺構出土遺物

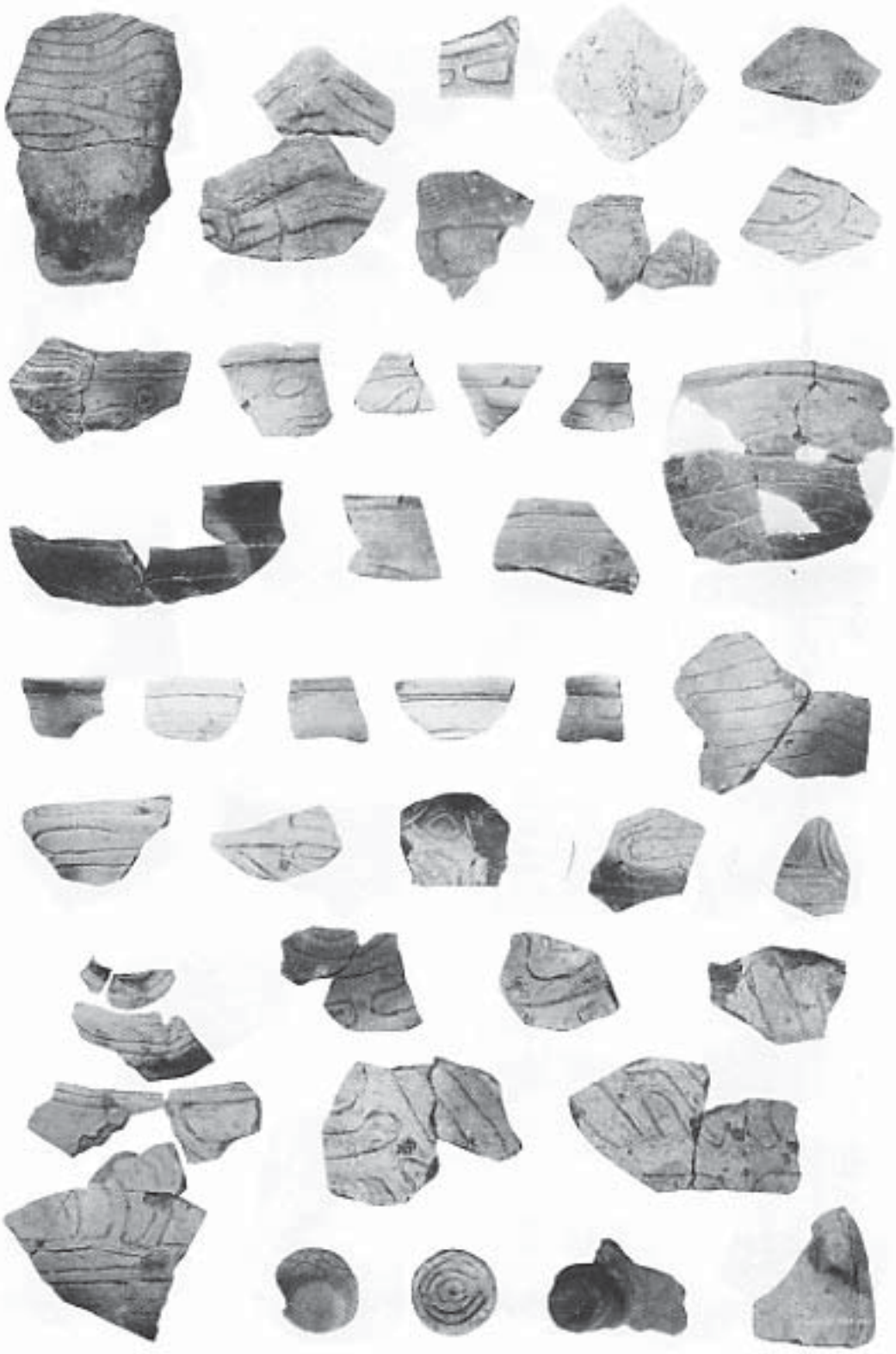


PL 4　出土土器(1)

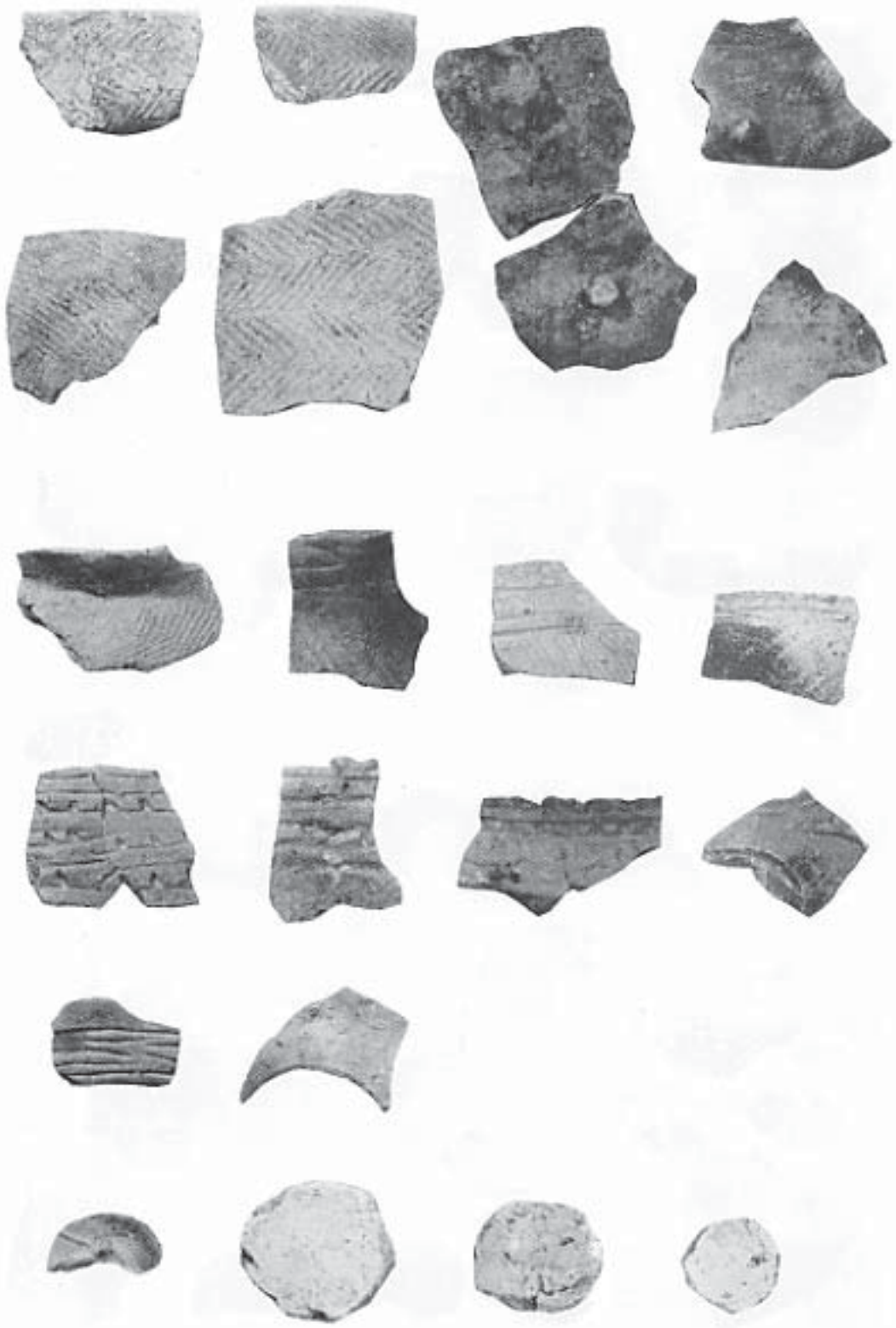
PL 5　出土土器(2)



PL 6　出土土器(3)



PL 7　出土土器(4)



PL 8　出土土器(5)

PL 9　石器・石製品

Ⅴ　まとめ

1．遺　構

本調査区より検出された遺構は、住居跡2、炉跡1、土壙1の計4基である。

第1号住居跡は、不整円形を呈し、テラス状の特徴的な構造をもつもので、出土遺物から縄文時代後期前半ないしは、それ以前に構築されたものと考えられる。

第2号住居跡は、方形の石囲い炉をもち、ほぼ楕円形を呈する住居跡と考えられ、出土遺物から縄文時代中期最終末期に構築されたものと考えられる。

炉跡は、縁辺部に一個の礫を埋設しているもので、確認状況から縄文時代後期前半に構築された屋外炉と考えられ、第1号住居跡との強い関連性がうかがえる。

土壙は、出土遺物から縄文時代後期前半に所属し、第2号住居跡を切って構築されているもので、その用途については不明である。

2．遺　物

土器は、縄文時代前期円筒下層d式土器を最古とし、縄文時代中期円筒上層b式、同中期終末期、縄文時代後期十腰内Ⅰ群、十腰内Ⅴ群、縄文時代晩期大洞B、B－C、C_1、A式の各土器が出土した。中でも縄文時代後期前半の十腰内Ⅰ群土器の出土量が圧倒的に多く、本調査区の主要遺物となっている。

石器は、石鏃、石匙等の剥片石器5種類12点、石斧、くぼみ石等の礫石器7種類15点、総数12種類27点が出土した。石器組成は明確にできなかったものの、これら石器の大半は、土器の出土量から縄文時代後期前半に所属するものと考えられる。

3．遺跡の特徴

調査は、遺跡の一部に限定されているために、遺跡の全容を究明することはできなかったものの、本調査区では、縄文時代後期前半の遺物、遺構を中心として、縄文時代前期～縄文時代晩期と長期間にわたる遺物が出土している。これまで、田茂木野遺跡は縄文時代晩期を主とする遺跡とされてきたが、調査の結果から考えると、遺跡の包括する内容はより豊富で、縄文時代各時期にわたる複合遺跡であると考えられ、周辺にはより多くの遺構の存在が予想される。中でも、縄文時代後期後半の遺物は、他の遺跡の出土例をみるならば、遺構及びその周辺からの出土が圧倒的に多く、調査区の周辺に遺構の存在が予想される。また、遺跡の範囲は、台地の西側、沢の縁辺部を中心としてより広範囲に及ぶものと考えられる。

（塩谷　隆正・山岸　英夫）

田茂木野遺跡発掘調査報告書

発　行　日　：　昭和61年3月311日
発　行　者　：　青森市教育委員会
執筆・編集　：　塩屋隆正、山岸英夫
印　刷　所　：　青森オフセット印刷株式会社